

---

# サガとちいと中田さんと

幸路 ことは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サガとちいと中田さんと

### 【Nコード】

N2139Q

### 【作者名】

幸路 ことは

### 【あらすじ】

ねえサガあ。ひまなんだけど。

あそぼーよ。本ばつか読んでないでさあ。ねーったら！

いい加減にしてくれないと噛みつくからね！

私は本気よ！

え、あらすじ？

可愛い私の優雅でまったりした生活よ！ タイトルもちいの……  
って違うし！

ちよっとサガ！ どーゆうこと！

……もういいじゃん。本編にいいつよ。

## 山の奥には仙人がいます

むかしむかし、一人の仙人がいました。本を読むのが大好きで、めったに外に出ないひきこもりでした。

ある時、一匹の猫が転がり込んで来ました。仙人の戸惑いなど関係無く、猫はそのまま住み着いてしまいました。

そして現在、この山奥の社には、おばちゃんが家政婦として働きにきています。

「サガ。ねえサガあ……仙人ってば！」

春のやわらかい日差しが入ってくる部屋に、子どもの声が響く。「ねえなんかしてよ」

声はだだをこねる子どもそのものだが、あいにく姿は見えない。そこにいるのは読書中の女性。その隣りに黒猫がちょこんと座っている。

「なんかしてくれなきゃサガで爪研いじゃうぞ！」

脅し文句を言いながら、黒猫が必死に衣を引っ張っていた。

「……はいはい。分かってるって。」

先程から衣を引っ張られている女性は、喋る黒猫の頭の上に手をおいた。本からは目を離さずにぐりぐりと撫で回す。黒猫は少し目を三角にした。

「ちがう！ そーじゃなくてなんかやってみせてよ！」

喋る黒猫も異様な光景ではあるが、それと当然のように会話をしている女性も変わった容姿をしていた。

腰まで伸びる髪は白く、すそはきれいに切り揃えられている。後ろから見れば老婆のようだが外見は若々しく、二十代、見様によれば十代後半にも見える。さらに服装は十二単を三単ぐらいに簡略したものを着ており、上に羽織っている衣の裾が床に広がっていた。

絵巻の中から抜け出したような女性だ。

「仙人なんだから空飛んでよ」

「嫌だよ。……面倒臭い」

バサリと断った女性は呼び名のとおり仙人だった。仙術を使い、治癒や人を煙に巻くのはお手の物だが、面倒臭がりゆえ存分に力を発揮することはない。

「またまたそんなこと言って。ほんとに飛べないんでしょ」

「飛べるに決まってるだろ。ちい。今私は忙しいんだ」

ちいと呼ばれた猫は前足でダンダンと床を叩いた。

人という地団駄だ。

「本読んでるだけじゃん。私はかまってほしいの。遊んで欲しいお年頃なの！」

ちいは仙人の衣の裾をガジガジと嚙り始めた。要求が通らない時は実力行使だ。

（かまって。暇なの）

「昨日、私が撫でたらそっぽ向いてどっか行ったよね」

仙人は本から目を離し、恨みがましいまなざしをちいに向けた。

「昨日は一人でいたい気分だったの！」

「……わがまま」

仙人の呟きを三角の耳で捕らえたちいは、シャンと背筋を伸ばして尻尾で床を打った。

「猫はそーいうものなのです。わがままな生き物なのです」

ちいは特技、開き直りに出た。

「猫だってもう少し聞き分けのいいのはいるよ」

「私はただの猫じゃないのです。仙猫なのです。サガは仙人なんだから猫のわがままくらい聞けるでしょ」

「どーゆー理屈よそれ」

毎度のことながらよく回る頭と舌だ。仙人は今までちいに口喧嘩で勝ったことがない。

「サガは私より長生きなんだから。私のわがままを許すべきなので

す」

「生きてる長さは関係ないし。それに猫のわがままはもつと可愛いはずよ」

「私は仙猫だからただの猫じゃないのです。わがままもただのわがままではいけないのです！」

早口でまくし立てられた内容はどこから切り込めばいいのか分からないほど屁理屈の塊だった。

（うわ……かわいくねー）

「……仙猫なら仙人を敬え！」

仙人が声を荒げると、ちいは前足を口許に添えて、まあ！

と驚きのポーズを取った。それがさらに仙人の神経を逆撫でする。

「まあまあ！　仙人ともあろう人が猫に敬えですってえ？　ま

！。ずいぶん偉いんでしょーね。一日中働きもせず本を読んでることがえらいんだったら隣りでゴロゴロしてる私はどれだけえらいんでしょう？　ねえ教えてくれませんか？」

一息で言い切ったちいはどうだ、と勝ち誇った顔で仙人を見上げた。

そしてうつ、と詰まった仙人にさらに畳み掛ける。

「猫は気ままなところが愛されているのです。わがままなところが可愛いのです。ツンデレが古今東西の猫萌えなのです！それがわからないなんてまだまだサガは子どもね！」

仙人は口許をひくつかせながら、口撃に耐える。が、たかぶった感情を抑えていられるのも時間の問題だった。

「ちい……ご飯抜きだ！」

青筋を浮かべた仙人は切り札を出した。ちいは目を大きく見開き、牙をのぞかせる。

「いいもん！　中田さんにもらうから！」

「中田さんにご飯抜くように言っておく！」

「中田さんはそんなことしないもん！」

ちいは四つ足で立ち上がると毛を逆立たせた。

（ご飯を盾にするなんて許せない！）

「中田さんを雇ってるのは私なんだからね！」

「横暴ー！ 動物愛護団体に訴えてやる！」

「喋る猫なんて相手にされるわけないし、捕まって売り飛ばされるだけだ！」

「じゃーいいもん！ 中田さんにサガのご飯も抜くように言うておくから！」

売り言葉に買い言葉。不毛な口喧嘩は夕飯問題へと発展した。何で言い争っていたかなど、すでに記憶の彼方だ……。

「仙人愛護団体に訴えてやる！」

仙人も負けじと言い返すが、ちいは鼻で笑った。

「へへ。やってみればあ？ どーぞどーぞ。できるもんならやつてみなさいよ」

そして駄目押しと言わんばかりににんまりと笑った。仙人が山から出たが最後、怪しさ満点で補導されて、研究者に引き渡されるのが目に見えているのだ。

「そんな手に乗るか！」

さすがに仙人もそれは分かっていた。

「じゃあサガはご飯抜きね」

「別にいいし。仙人はご飯を食べなくても霞を食べて生きていけるから大丈夫だもん」

「へへ霞い……」

ちいの目が半眼になり、口角を上につり上げた。そのまま斜め四十五度に顔を傾けて仙人を睨む。この角度が研究のすえに見つけた一番迫力のある角度だった。

「取って食べてこれば？ 今日は晴天で霞なんてどこにも見当たりませんけどねえ。いやー楽しみだわ。ほら行つてきなさいよ」

一つ言い返せば十返つてくる。完全に仙人が劣勢だった。

（にーくーたーらーしー！）

「こっ……」

「さつきからごちゃごちゃと何を言ってるの！」

悔しさが募る仙人の反撃は、別の怒号によってかき消された。

空気がビリビリと音を立てるような大音量に驚いた二人は、声のした方へ顔を向ける。

そこには、部屋の入口で仁王立ちをする中田さんがいた。中田さんは仙人が雇っている家政婦で、五児の母。どこへだってママチャリで駆け巡る元気なおばちゃんだ。右手にはお玉を持っており、どうやら夕食の準備中だったらしい。

「それはちいが……」

「だってサガが……」

二人そろって弁解を始めるが、次の怒号が飛んできた。

「少しは近所迷惑を考えなさい！」

中田さんは自分の子どもと同様に叱り飛ばした。

二人は目をパチクリとさせた。数秒間言われたことを考えてみる。近所迷惑。ご近所トラブルにも発展しかねないものだ……が、ここは山の奥、耳を澄ませば鳥のさえずりが聞こえ、隣人はと聞かれれば動物たちである。

近所迷惑とかはないんじゃない……と二人は心の中で思うが口には出さなかった。鬼の形相を前にすれば身を縮ませるしかない。

「それで、夕食はいらないんですね？」

どうやら喧嘩は筒抜けだったらしい。中田さんは腕を組んで憤然と二人を見下ろす。お母ちゃんモード全開だ。

「別に無理に食べるとは言いませんけど、せっかく今日は仙人さんの好きな茶碗蒸しだったのに。それとちいちゃんにはネコ缶を開けようと思ってたのに……」

残念ね、と中田さんは頬に手をやって呟いた。

その言葉に二人は呆然と中田さんを見上げた。

（ご飯質取られた）

そして夕食の危機を迎えた二人は互いに視線を交わし、固く手を握り合った。

停戦協定成立。

猫にも仙人にも好物より勝る爆弾は無かった。

「食べる！　もう喧嘩は（今日は）しないからネコ缶ちょうだい！」

（ネコ缶食べられないとかイヤ！仙人なんてもういいから！）

「茶碗蒸し食べたい」

（ちいとの喧嘩より中田さんのご飯のほうが大事）

反応が自分の子どもと全く同じで、中田さんはつい笑ってしまった。やれやれとため息をついてやんわりと微笑んだ。

「分かったから。おとなしく待っていてくださいね」家政婦の顔に早変わりして中田さんは台所に戻っていった。

中田さんが去ると、二人は肩の力を抜いて一息ついた。

（よかった〜ご飯食べられる〜）

しばらくしてちいは、仙人の膝の上に登って丸くなった。

「今日のネコ缶何かなあ」

仙人はちいを撫でながら答える。ちいが気持ち良さそうに目を細めた。

「まぐろじゃない？」

「まぐろはいつも入ってるよ」

「おいしければなんでもいいじゃん……あ、ちい。桜が咲いたみたいだよ」

仙人は窓の外を見やって弾んだ声で言った。窓枠には桜の花を加えた雀が跳ねていた。散歩にすらでない仙人に春を届けてくれたらしい。

「庭の桜も早く咲かないかな。そしたら花見ができるのに」

夜桜を見ながら一献傾ける。酒好きの仙人にとっては至福の時刻だ。

「おいしそー」

ふいにそんな呟きが膝の上から聞こえた。ちいの体が小刻みに揺れている。

その目にはチュンチュン跳ねる雀が……。

「とーりー〜〜！」

体勢を低くしてからの大ジャンプ。ちいは獲物めがけて飛び掛かった。

「ちい！」

「ぎゃああ！」

仙人は慌ててちいの尻尾を掴んで引き寄せる。ちいはすっぱり仙人の腕の中だ。

驚いた雀は桜を落として飛び立ってしまった。

「ちよつと！尻尾はデリケートなんだから触らないで！」

「目が獲物を狩る目だったじゃないか！」

「……だって、動いてるものを見るとつい。猫だから」

「……猫だしね」

仙猫であつても猫は猫なのだ。

そして仙人はちいを抱き締めたままころんと横になった。窓から入ってくる風は太陽の暖かさと香りを運んでくる。

「お昼寝に最高の季節になったね」

ちいはくわつとあくびをして丸くなった。

「そうだね。明日は庇の下で日向ぼっこをしようか」

「……さんせーい」

春の陽気は簡単に眠気を誘う。部屋にはいつしか寝息が聞こえだし、中田さんに起こされるまで二人は夢の中を漂ったのだった。

「——ネコ……缶……重い」

仙人の腕の下でもがくちいの寝言は、部屋に吸い込まれ、再び寝息だけになる。

のどかな春、昼下がりの一時。

仙人の一日はゆるゆると過ぎていくのでした。

山の奥には仙人がいるのです（後書き）

わたくしこと、幸路ことは、ここに不定期を宣言いたします！

豆まき 〱 仙人の逆襲〱 (前書き)

小ネタです。短いのは御愛嬌で。

## 豆まき　く仙人の逆襲く

「サガ、豆まきしよ！」

唐突にちいがそう言った。

読書中に仙人の前に豆が二袋投げ出された。明日は節分ですから、と昨日中田さんが置いていったものだ。

「豆まき？」

人間の風習、文化全てに興味のない仙人は胡乱氣に訊き返す。

「そうよ。人間の風習。二月三日に豆をまいて鬼をはらうのよ」

うきうきと説明するちはすでに人間に化け、投げる気満々だ。

「鬼？　どこにいるんだそんなもの」

仙人の家には付喪神はいても鬼はいない。

「ふふふ」

ちいは怪しい笑い方をすると、鬼の面を仙人の頭にかぶせた。節分の豆についていたお面である。

「何だ、これ？」

仙人はそれを外し、まじまじと見る。赤い、どこことなく愛嬌のあ

る鬼だ。

「ちゃんと被ってよね」

ちいがそれを仙人に被せ直し、ます杓に豆を入れて準備を始める。

「何をするつもり……うわっ！」

豆まきは突然始まった。

「鬼は〜外！ 鬼は〜外！」

ちいはにこにここと笑いながら豆を仙人にぶつける。ふいを突かれた仙人は慌てて逃げ回った。

「鬼は〜外！ 鬼は〜外！」

福は内がなかなか呼んでもらえないのは、ちいの性格だろう。

「痛い！ 急に何するのよ！」

仙人は必至に逃げるが、動くものを追いかけるのが猫の習性。そう簡単に逃げられない。

「鬼は〜外〜！」

数分間鬼ごっこを続け、とうとう仙人はお面を取り床に叩きつけた。

「疲れた！ 交代して！」

息の荒い仙人に、ちいは不満そうに唇と尖らせる。

「えゝ、もつとあそ……豆まきしたい」

つい本音がでてしまいそうになった。

だがしばし考え、ちいはニヤリと笑った。

「いいわ。今度は私が鬼をやつてあげる」

そして自ら鬼の面をつけた。

仙人は新しい豆の袋を開けて枡に入れる。

「いくよちい！ えっ」

仙人が大きな目的目がけて投げようとした時、すでにちいは猫の姿に戻って部屋を駆け回っていた。

体に合わせてお面も小さくなっているのは化け猫の力だろう。

「ちよつとちい！ ずるいんじゃない？」

「私は猫です！ こつちが本来の姿なんですゝ。仙人なんだからこれぐらいどーとでもなるでしょ？」

「ちゝいゝ。鬼はゝ外！」

仙人は豆をむんずと掴み、ちいに投げるが、ちいは俊敏な動きで

それをかわす。

「鬼はゝ外！ 外！」

「へっへん。あたんないよ」

ちいは調子にのって空中で宙返りまでみせる。

「鬼はゝ外！」

「ダメダメ」

今度はバク宙だ。

完全にかかわれている仙人は、ぴたりと動きを止め、ぼそっと呟いた。

「ちい。私、本気ですから」

「え？」

そう宣言すると、仙人は枡に入った豆を全てぶちまけた。

「ちょっと、サガ？」

もしかしたらいけないスイッチを押したかもと後悔してももう遅い、次の瞬間、仙術によって宙に浮いた豆たちが一斉にちいに襲いかかった。

「鬼はゝ外！」

「きゃ〜！ ごめんなさい！」

四方八方から飛んでくる豆。必至に謝るが、一度スイッチの入った仙人を止めることなど出来るはずもない。

「も〜こうなったら！」

意を決して立ち向かってみるが、にこにこ笑っている仙人に逃げ腰になる。

「鬼は〜外〜！」

ちいは結局仙人が満足するまで部屋を走り回るはめになった。復讐をその胸に近いながら……。

そして翌日、豆が散乱した部屋に中田さんが眩暈を起こし、二人仲良く説教を受けたのだった。

## 中田さんの仕事探し

中庭の桜は満開になり、枝で鶯が遊んでいる。山は桜でうつすら色付き、見る者の心を浮き立たせる。

山の麓に立つ社の東屋。その窓から二つの顔が覗いていた。少女のものと黒猫のものだ。二人ともぼけっと外を眺めていた。

「中田さんまだかな？」

「まだかな？」

暇な二人はこうやって中田さんを待つのだ。中田さんの話はいい退屈しのぎになる。仕事の後について回るのも楽しいものだ。

「そつえばさあ……なんで中田さんがいるの？ いつの間にかいて馴染んでたから聞くに聞けなかったんだけど」

ちいは顔を仙人に向けた。仙人は今頃？ と気の抜けた声で返した。

「あれはね……ちいのせいなんだよ？」

「はい？」

視線を森へと向けながら、仙人は話した。

雪が積もる冬。社は雪に埋もれ、屋根から落ちる雪が仙人の心

臓を驚かしていた。部屋にガラスはなく、北風が容赦なく入ってくるので一日中火鉢は手放せない。

そんなある朝、仙人は窓辺で小鳥と話をしていた。

「なんか面白いことないかな」

「雪合戦でもしますか？ 山のみんなをお誘いして」

この鳥はその昔仙人に仙力を与えられて、言葉を得たのだった。そしてちいがいない時を見計らってやって来る仙人の友たちだ。

「やだよ……動きたくない」

鳥は憂い顔で外を眺める仙人を見て溜息をついた。

「ちいさん。帰って来ませんね」

仙人の元気のなさや鳥が毎日訪れている原因は、もはや何度目かわからないちいの家出だ。

しかし、いつもなら数週間で戻るのが、今回は2ヶ月経っても帰ってこない。

「そのうち帰ってくるよ」

「そう言ってもう二か月になるんですよ。今冬ですよ？ もしかしらもうどこかで……」

「ちいは殺しても死なないから大丈夫だ」

仙人は胸に広がる不安をこまかそうと不機嫌そうに言った。

「……そんなに心配なら探しに行けばいいじゃないですか」

「誰が行くか！ あいつはこんなこととして出て行ったんだよ？」

と指差すのは本棚。本は所々千切れ、棚は爪痕が生々しい。

「あんなの仙術ですぐ直りますよね……」

「う……」

確かにすぐに直そうと思えば直せるのだが、ちいが帰ったらなじる口実にしようとなわざと残してあるのだ。

「きつとちいさんも仙人に探して欲しいんですよ」

「絶対嫌だ！　なんか私が負けたみたいじゃないか！」

「そこは折れましょうよ。仙人だって寂しいから毎日私と話をしてるんじゃないですか」

「うう……」

「そもそも仙人が引きこもって一人にいるからこういう時に相手をしてくれる人がいないんですよ？」

鳥は容赦なく仙人の痛いところをつく。シュンとしていた仙人だったが、やがて決心をした表情で机に向かった。紙を取り出し、筆先に墨汁を染み込ませる。

「やっとやる気になりましたか……」

「うん。私、人間を雇うことにする」

「……はい？」

「そうよ。ちいがないなら人間がいるじゃない」

仙人は意気揚々と紙に文字をしたためていく。

（意地の張り合いもここまでくると見事ですな）

鳥が呆れている間にも、紙は黒く染まっていく。

仙人は最後に簡単な地図を書き加え、それが乾くと紙ヒコーキを折った。

丹念に丹念に筋をつけて折り込んだ。

そしてできたそれを誇らしげに鳥に見せる。

「で、なんですか、それ」

「これを飛ばして家政婦を募集するんだ」

そう言つと、仙人は窓からすつと飛ばした。それは見えない力に引つ張られるように空高く飛んでいく。

「……あんなんで来るんですか？」

「さあ？」

仙人に取つては意地と暇つぶしでしかないのだ。

（はあ……ちいさん早く帰ってこないかな）

鳥は空を進む紙ヒコークを目で追いながら、黒い化け猫を想った。

数日後。仙人が読書をしていると、息を切らして鳥が飛び込んできた。

「た、大変です！」

「何？　ちいが帰ったの？」

「違います！　人間が、人間が来ました！」

「は？」

この社は山の麓、裾野には深い森が広がり自殺スポットにもなっている。ゆえに地元の人間でさえ奥深くには入り込まないのだ。

「なんか、お、おばちゃんが自転車で激走して、この社に！」

「おばちゃん？　ジテンシャ？」

仙人は立ち上がって、うろつろと歩き回る。

「仙人？」

「ど、どーしよ。私人間となんて千年以上会ったことないよ！」

「じゃあなんで募集したんですか！」

「ノリ！」

仙人は忙しく動き回り、鳥も部屋の中をバサバサと飛ぶ。

「ひとまず、あの紙になんて書いたんですか？」

「え？ 家政婦募集中。仙人の家で働きませんか、興味のある方は下の場所まで」

「……仙人って、書いたんですか？」

「あつ」

もし鳥に手があったのなら、額を押さえていただろう。そして同時に思う。

仙人と知った上でやってくる人間は一体どんな人だろうか。

「仙人として人と話すってどうすればいいんだ？ やはり仙人らしくしたほうがいいのか？」

鳥は仙人らしさって何？ と思いながらも、人間と会おうと努力する仙人を後押しすることにした。

「そうこうするうちに来ますよ！ 部屋を少し片付けて！」

「わかった！ 人間が来たら教えてくれ！」

仙人は床に散らばる本を拾いだした。が、窓枠に留まっていた鳥が声をあげた。

「あ、来てしまいました……」

「はやっ！」

仙人はまとめた本を部屋の隅に置くと、爆発寸前の心臓をなだめる。

（落ち着け私。何年生きているとおもうんだ？）

キッツとブレーキの音が聞こえ、

「ごめんくださーい」

社の東屋に、女の声が響いた。

小さな玄関に立っていたのは、中年の女性。パーマのかかった髪、少し堅い感じの普段着を着ている。まさに絵に書いたようなおばちゃんだ。

「よく、来て、くれたね」

仙人は緊張のあまり舌を噛みそうになる。

「あらおじいさん。本当に仙人だったんですね！ この家を見た時

からそうじゃないかとは思ってたんですけど」

その時玄関に回り込んだ鳥が現れ、目に映った光景に目が点になった。もともと目は丸いのだが。

（何やってんですか！）

和やかに会話するおばちゃんも驚きに値するが、何より、仙人の姿がおかしい。

ピカリと光る頭に白く長い眉と髭。見にまとうのは白い胴着。こちらに絵に書いたような仙人である。

「えーっと、どうぞ中に」

仙人はぎこちない動作でおばちゃんを中に入れた。仙人の部屋に案内し、座布団をだした。そして両者向かい合って座った。問答でも始まりそうだ。

「家政婦募集の案内を見て面接に来ました。中田です。」

中田さんはキリツと姿勢を正してお辞儀をした。

彼女の話によると、洗濯物を干していたらどこからとなく紙ヒコーキが落ちてきて、捨てようと思ったところ中側の字に気付いたそうだ。

「あつ、えっと、わたしは仙人のサガです。ええと、中田さんの名前は？」

「あ、申し訳ありません。仙人に名前を渡せば命が危ないと聞いたので……」

「そ、そうですね」

いくら世に疎い仙人でも、それは陰陽師では？  
と思つたが

「それで、本当にここで働くのかい？」

「はい。時給千円は魅力なので！」

適当に書いた金額とは口が裂けても言えない。

「わしはこんなんだが……」

「ヘルパーの資格も持ってます」

「……そうかい。じゃあ、お願いするね」

断るという選択はもとよりなく、人物比較も周りにろくな人がいないのでできないまま、仙人は初めて人を雇った。

その後中田さんは東屋の中を見て、帰っていった。

仙人は変化を解いてグツタリ横になる。中田さんのパワフルさに生気を吸い取られたようだ。

「仙人……大丈夫なんですか？」

「これぐらい、なんてことはない」

そして、中田さんの日々が始まった。

初日、中田さんは驚きの連続だった。

まずは掃除と仙人の部屋を片付けると、年代物の本が山のように出てくる。竹巻まで発見された。それらを本棚に戻していく。

「あの、仙人さん。本棚が足りないような……」

「ああ。隅に積んどいてくれ」

仙人の部屋に本の塔が出現した。

中田さんは仙人の部屋を片付け終わると、隣りの部屋へと続く襖に手をかけた。

「あ、中田さん。そこは……」

遠慮がちにかけられた声は一步遅く、中田さんは襖を開け放った。

「ひっ」

短く叫んで、すぐに閉めた。

「あの、ここなんですか？」

「物置」

「カオスなんですけど」

ちらりと見ただけでも天井に届くかというほどずっと高く積まれた物。壺やら箱やらが無秩序に積まれているらしい。

「私、ここパスしてもいいですか？」

「そのほうがいい。そこ、色々いるから」

そして中田さんは逃げるように台所へと向かった。

台所と言っても現代のそれではない。釜戸に水瓶と、風情がある。はつきりいえば古すぎる。

「うすうすこうじゃないかと思ってたけど……どうやって火を起こしましょうか」

釜戸の側に薪は積んであるが、釜には埃が積もり、ずいぶん使われていないようだ。

昼食のために食材は買ってきたが、火がなくては何もできない。中田さんは埃を払って、釜戸を覗き込んだ。灰の中に燃え残りが、丸い炭がある。

そしてパチリと、中田さんはそれと目があつた。キリリと上がった眉に眉間のしわが印象的な漢だ。（いとお）  
たっぷり三秒間見つめ合う。

「きゃ〜〜！　目が！　目があー！」

「お？　おお？　なんと珍しい。人間だ。誰じゃ？」

豆炭は目を丸くしている。

「わ、私は中田と言いまして、か、家政婦として手伝いに」

あわあわとパニックになりながらも中田さんは答えた。

「おお！ 女中殿とな！ あいわかった。ならばあつしも一肌脱ぎやしよう！ ささつ、その薪を入れてくだせえ」

中田さんは首が千切れる勢いでうなずき、薪を入れる。空気が入るよつにとの工夫は、息子のボーイスカウトで培ったものだ。

「では、参りますぞ」

豆炭はころころと転がり、薪の真ん中に入り込む。そして気合が發した。ぼつという音とともに豆炭から發火し、徐々に薪に広がった。

「あの、熱くないんですか？」

「なんのこれしき。あつしは豆炭の付喪神つくもがみでさあ。燃えるのが仕事なんす」

付喪神はよく使われた物が永い時をかけ、意思を持ったものたちだ。

中田さんはそうか付喪神かとわり切ることにした。仙人がいるのだから付喪神がいたっておかしくはない。むしろ開き直らないと精神が持ちそうにない。

中田さんは野菜を切り、戸棚から中華鍋を發掘した。それを火にかけ野菜を炒める。昼食は焼きそばだ。手際よく料理し、美術館

にありそうな皿によそる。違和感この上ない。

「いやはや、あつしは感動しやした！ この釜戸で料理をしても  
らえるとは、何百年ぶりか！」

豆炭は釜戸から転がりでて滝のような涙を流した。まだ赤みを  
帯びているので流したさきから蒸発していく。

「仙人さん、よく生きてられましたね。いや、むしろ仙人だから？」

「仙人さんはものぐさなんす。だから、ぜひ女中殿が仙人さんにま  
ともな生活を遅らせてやってくだせえ！」

漢の真摯な頼みに心を打たれ、中田さんは拳を握って答えた。

「わかったわ。この中田さんにまかせときなさい！」

「頼りにしやす！ で、さっそくで悪いんですが、あつしを仙人  
さんのとこまで運んでくれやせんか？」

「えっと、火箸でいい？」

「お願いしやす」

豆炭は火箸で掴まれ宙に浮いた。

「いつもなら仙人さんが火鉢に運んでくれるんすよ」

「そうなんだ。……仙人さん、豆炭です」

仙人の部屋と台所は近い。急に呼び掛けられた仙人は肩をびくりと震わせた。

「あ、豆炭、忘れてた」

豆炭は火鉢に入り、仙人はそこに手をかざす。

「今ご飯を持って来ますから」

中田さんは台所へと戻った。

「いい女中殿っすな」

「だろう」

「で、仙人さんはいつからイメチェンをしたんで？」

「……うるさい」

仙人はその後初めて食べる焼きそばに感動しながら昼食を終えた。

仙人になる前には食べたことのないものだ。

そして中田さんは夕食の支度をし、温められる状態にして早めに帰っていった。

時はすぎ、寒さは和らぎ雪は溶け始めた。春が近付いていることを予感させる。

そして中田さんがこの家に馴染み、仙人が食事の楽しさを覚え

だした頃、その時が訪れた。

仙人は中田さんに手助けしてもらって机の前に座る。仙人のおじいさん動作はだいぶ板についてきた。

そして溜まりに溜まった本を整理し、分かる範囲で表名を書いていく。

中田さんは仙人の着物をたとんでいた。

自然と談笑が生まれる。

そんな和やかな光景を見ている者がいた。仙人の後ろの窓に、影が一つ。

黒猫が窓にしがみついて中の様子を伺っている。その背中には、なぜか自身の体よりも大きな鮭。

ちいは、呆気にとられて二人を見ていた。

（何？ 一体何があつたの？ 誰よあのおばちゃん！ し

かも何？ ヒゲ仙人？ わけわかんない！）

長い家出から帰り、華麗に登場しようと思えばこの有様である。

（仙人はどこ？ もしかして私を探して旅に出たの？ だからヒゲ仙人が現れてここを乗っ取ったの？）

グルグルとちいの胸に不安が渦巻く。帰ってきたら自分の家がないなんて嫌すぎる。

（あう、仙人ごめん。私のせいで家が無くなっちゃったあ）

悲しくて目が潤みかけたが、あるものに目を留めた。ヒゲ仙人が羽織っている上着には、蓮を象った模様が描かれていた。これは仙人が大好きな模様だ。

（ああ……そう）

ちいは、全てを理解した。

（私が出したって言うのに心配もしないで若い女とイチヤイチヤイチヤイチヤ……）

「ごうつとちいから怒りの炎がのぼる。

音もなく部屋に飛び降り、助走をつけて跳び上がった。

「何やってんのよー！」

怒りの猫キーク！

怒りと背中 of 鮭で、威力は通常の四倍だ。

「ふぎゃー！」

不意打ちに仙人は顔面を机で強打した。その衝撃で変化が解ける。

「いったい！」

鼻を押さえて仙人が振り向くと、ちいが目を三角にして睨んでいた。

「あ、ちい」

「サガ！ 私というものがありながら、このおばちゃんは何！まさか浮気したの！？」

ちいは凄い剣幕で言い迫る。

「しかも人間？ あんた血迷ったの？ そんなに寂しいなら素直に言えばいいのに！」

「まあ！ 仙人さんが女の子になったわ！ きゃあゝ猫が喋ってる、可愛いゝ」

突然のことにしばらく凍結していた中田さんだったが、順応能力を開花し、目を輝かせている。

「おばちゃんは黙ってて！」

不覚にも可愛いの一言に心が跳ねてしまった。

「いや、これは浮気じゃ……」

「なんなのよ！ 楽しそうにイチヤイチヤイチヤイチヤと！……あう」

中田さんは怒り心頭で恋人の修羅場を展開させるちいの前に、お皿をすつと置いた。ちいの好きなネコ缶だ。そして期待するような目でちいを見る。

「な、この私を誘惑、しようって………いうの！ …… ひ、卑怯よ！」

「食べながら言っな……」

ちいは猛烈な勢いで食べていた。よほどお腹が空いていたらし

い。お皿までペロリと舐めると、再び口を開く。

「私を除け者にして！　　そんなに出て行って欲しいなら出てくわよ！」

しばらくわーわーとまくしたてたが、しまいにはぐじゅぐじゅと泣き出してしまった。

「仙人の、バカ。バカバカバカ……！」

さすがに仙人も動揺してなんとか宥めようとする。

「違うんだ。これはつまらない意地で……」

「意地……？」

ちいは涙を拭い、無表情で聞き返す。それがとても怖い。

「あ、いや。寂しかったんだ」

「寂しい？」

「……ちいが帰ってこないから」

仙人がぼそぼそと呟くと、ちいは一転勝ち誇った笑みを見せた。

「ほーら。やっぱり私がいないと何にもできないんじゃないんじゃん！　　寂しいんですよ？」

「……はい」

今ここで言い返したら暴れだしそうなので、仙人はしぶしぶうなずく。

「私の大切さに今頃気付くなんて遅いのよ！」

ちいはすっかり気分をよくして胸をはった。そして中田さんへと近付くと、背中鮭を下ろした。

「料理して」

「お安いご用です」

「刺身とカルパッチョと焼き魚に、鮭茶漬けね」

「はい。捌いておきますね」

中田さんは鮭を片手に台所へと向かった。部屋には毛づくろいをするちいと、火鉢にあたる仙人。

「で？　今回はどこに行ってたのさ」

「ん？　北海道。熊に鮭取りを教えてもらったのよ」

それで土産が鮭か、と納得する。ちいはまたサバイバルの腕を磨いたらしい。

「ねえちい。次は行き先くらい……って寝てるし」

ちいはよほど疲れたのか丸くなってすでに夢の中だ。

仙人は安堵混じりの溜め息をついた。

「つてこと」

「へー。サガってバカ？　なんでヒゲ仙人だったの？」

辛辣なちいの言葉に仙人は短く呻いた。

「だって、ちいが前に書いてた仙人があんなだったから」

「まあ、人間はあんなイメージみたいけど……あつ！　中田さんが来た！」

「ほんとだ」

キッツと自転車のブレーキ音が響いて、玄関から明るい声がする。

「おはようございます！　ちゃんと朝ご飯は食べましたか？」

今日もにぎやかな一日が始まろうとしていた。

## 仙猫ちいの寢床探し

本日も暖かく、昼寝には最適の季節。

春眠暁を覚えず、の言葉どおりに、仙人とちいはスヤスヤと寝ていた。こんな日の目覚時計は、中田さんである。

「おはようーございまーす！」

元気な中田さんの声が東屋に響き、二人はパチリと目を開けた。仙人は目をこすり、ちいは顔を撫で、同時にあくびをする。

「二人とも、起きましたか？」

中田さんが仙人の部屋に入ってきて、布団をあげる。二人は布団から逃げるようにはい出ると、窓から入る日の光でしばし体を温めた。

中田さんは布団を片付け終わると、台所へ行きご飯を温める。中田さんがいなくても朝ご飯が食べれるようにと、作り置かれているのだが、中田さんが温めることのほうが多かった。

仙人はふらふらと井戸に行き、顔を洗う。

桶を投げ入れ、

「痛いっ！　冷たい！」

という桶の付喪神の抗議を無視し、カラカラと引き上げる。

冷たい水で顔を洗い、やっと目が覚めてきた仙人である。ぶつぶつ文句を言う桶を井戸端に起き、ぐっと伸びをした。

「ご飯の準備が出来ましたよ」

仙人は先程よりはシャキツとした足取りで部屋へと戻った。仙人の部屋にはちゃぶ台が置かれ、朝食が並んでいた。このちゃぶ台は仙人が物置から発掘した物で、あと五十年ほどで付喪神になる予定だ。

「いただきます」

二人は声を合わせると、味わいながら食べる。仙人が朝食を食べるなど、山中の動物たちが見に来るほどの珍事で、中田さんが働きに来た後の一週間は窓辺は鮎詰め状態だった。

ちいはあっさり味のネコ缶を食べてご満悦だ。

「うちそうさま」

二人は食べ終わると日向ぼっこを始めた。仙人はちいを撫で、ちいは目を細めて気持ち良さそうだった。

洗い物が終わった中田さんが部屋に来て座る。

「やっと朝食を全部食べてくれるようになりましたね」

「サガ全然食べないもんね。私が来たところからずっと」

「あら。ちいちゃんは最初っから仙人さんというんじゃないの？」

「違うよ。私が来てあげたの。そーだ、暇だから私とサガの感動の出会いを話してあげる！」

仙人は、あれのどこが感動だ、と半目になっている。

ちいは姿勢を正すと、少しもつたいぶって話だした……。

今から三百年ほど前の秋。東屋に吹く風は涼しく、仙人は読書の秋を満喫していた。ここを訪れるのは動物たちか仙人仲間だけだ。

仙人がここに住み着いてから、山から出たことはない。

仙人はこの日も起きるなり読書を始めた。時々鳥が窓辺に留まって木の実を置いていく。

食事を取らない仙人でも、木の実ならおやつ代わりに食べるからだ。

森の仲間は仙人の食生活が心配だった。

仙人は黙々とページを繰る。今日読んでいるのは、司馬遷からもらった史記だ。

秋風が仙人の髪を揺らす。仙人はページをめくった。

（きゃー！ 項羽カッコいいー！）

史記項羽列伝。場面は項羽が自らの首を刎ねたところだ。

仙人が項羽の男気に感動していると、ダンツと音がした。何かが落ちたのかと推測をつけて、ページをめくる。ダンツダンツ、次はさらに大きな音がした。

新しく付喪神が生まれたかと思い、本から目を離す。

そして目の前のものに気がつき飛び上がった。そのまま壁際まで後退して距離を取る。

目の前にいたのは一匹の黒猫だった。魚をくわえ、背中には数匹

の魚をくくり付けている。

猫はトテトテと仙人に近付いて、魚を投げ置いた。

「やけ」

仙人は猫が言葉を発したことにますます驚く。どうやら化け猫のようだ。

「やけ」

ぽかんとしている仙人に痺れを切らしたのか、猫が催促する。その言葉が魚の調理を意味することに気がついた仙人は魚に手をかざした。

（やく、焼く？ 火）

仙人の手の平から炎が出て、魚の表面が炙られていく。今度は猫が驚く番だ。

「かじ！ ばか！ そと！」

猫は体当たりで仙人の魚焼きを止めると、衣の裾を加えて引っ張る。

仙人はされるがままに外に引っ張り出された。

仙人の部屋の前まで移動し、猫は爪で紐を切って背中 of 魚を下ろすと、辺りを駆け回る。

仙人は久しぶりの外に、眩しそうに目を細めた。

猫は仙人の前に枝を集めて薪の準備をする。徐々に積み上がっていく枝や枯れ葉をじっと見ていた仙人は、閃いた顔をした。おもむろに手を伸ばし、点火した。

登る火柱、巻き上げる塵。

猫は枝を口から落として仙人に詰め寄る。

「かげん！　かげん！」

仙人は半目になりながらも火力を弱めた。パチパチと弾く音が聞こえる。

「さす」

と仙人の前に出された枝。これに魚をさせということだろう。仙人は慣れない手つきで魚を串刺しにし、火の近くにさした。

薪の前には出来上がりを楽しみに待つ猫。しっぽがゆらゆらと揺れている。

（……一体私は何をしているんだ？）

やっと落ち着いて状況を考え始めた仙人だ。

（この猫、人語を話せるということは化け猫なのだろうが、単語しか話せてないからまだ成り立てなんだろう）

しっぽもまだ二つに分かれてはならず、妖力もまだ未熟だ。

仙人は猫の頭に手を置いた。

（今のままでは不便だろう）

仙人はゆつくりと自分の力を猫に送り込んだ。仙人は以前にもこうやって動物に言葉を与えたことがあった。

猫はしつぽをピンと張ったが、やがてゆっくりと下ろす。

仙人が頭から手を離すと、猫はくるりと仙人の方を向いた。

「ちよつと、何したのよ。あれ、しゃべれる。スラスラ言葉が出てくるわ!」

猫は大喜びで薪の周りをグルグル回る。

「ほら、焼けたよ」

と仙人が魚を上げようとすれば、

「お皿は? まさか私に砂が付いたものを食べさせる気じゃないでしょうね」

と流暢に要求された。

仙人は仕方なく台所から皿を取ってきてその上に魚を置く。

猫は、仙人に覚ましてもらってからかぶりついた。

「固い。私はレアがいいの。やり直して」

「……さっきからあつかましすぎるんだよ!」

とうとう仙人の堪忍袋の緒が切れた。

「はあ? あなたのように家の中で魚を焼こうとしたり、薪でキヤンプファイヤーする人に言われたくないわ!」

猫は猛然と言い返す。ずいぶん口達者な猫のようだ。

（こいつに言葉あげたの間違いだった！）

時すでに遅く、仙人はまた魚を焼かされた。今度はしっかり生焼け。

「やればできるんじゃない。見直したわ」

ペロリと一匹食べ終わると、猫は上機嫌で東屋に入っていった。

（な、何様？）

仙人は怒りの炎を燦らせながら火を消した。

そして部屋に戻ると、本棚の前で丸くなっている猫の姿を発見した。

「……猫。そこで何をしている？」

猫は頭を上げて、くわっとあくびをした。

「寝るのよ。私ここ気に入ったから住むことにしたの」

「は？ 猫は自然に帰れ」

「まあまあ！ 仙人ともあろう人がひ弱な猫を追い出す気？」

この猫は彼女が仙人であることも知った上でここに居座るらしい。

（にくたらし）

「あと、私にはちいつていう立派な名前があるんだからね！」

仙人はもう知るかとおてくされ、読書を再開した。

猫はスヤスヤ眠り、その日から明るく元気に仙人の家に居候しているのである。

「どう？ 感動でしょ？」

とちいは得意そうに胸を張った。

「どこが。不幸のオンパレードじゃないか」

「ちいちゃんが仙猫の理由が分かりましたよ」

「それからずっと私がサガの面倒見てきたんだから」

主に朝の目覚ましアタックと食料調達である。

「一人で生きていける……」

「無理よ。寂しくて死んじゃうわ」

「大丈夫だ！」

「ムーリ！」

本日も東屋には、二人の元気な声が響くのだった……。

## 仙人宅の大掃除

桜も散って葉桜となり、山は若緑色に色付き、木の葉を風に吹かせる季節。

仙人は窓際で読書をし、ちいは窓から入る日光で日向ぼっこをしていた。

ちいがくわつとあくびをし、けづくろいを始めた。

そんな柔らかな日差しあすまやの午前。穏やかな東屋に、中田さんの悲鳴が響き渡った……。

「きゃあああああ！」

二人は頭を上げ、互いに顔を見合わせる。すぐにドタドタと廊下を走る音がし、戸口で止まった。

「大変です仙人さん！ 壁を壊してしまいました！」

中田さんが片手にはたき棒を持って駆け込んできたのだ。申し訳ございませんと、土下座をしそんな勢いである。

「……壁？」

そんなもろい壁などあったかと仙人は首をひねる。東屋は築数百年。仙人の力で老朽化は免れているが、どこか綻びが出来て来たのかもしれない。

「それぐらい仙人なら直せるでしょ？」

ちいはうーんと伸びをして中田さんへと歩き出した。完全に他

人事である。

「その壁見たーい」

その上自分勝手好き勝手。猫の本文である。

わたわたとしている中田さんに連れられて、二人は 現場へと赴いた。

中田さんが掃除をしていたのは廊下の突き当たりで、本が山積みになっていたところだ。天井近くまで本が積まれ、向こうに壁があることも分からなかった。

本は廊下の端に避けられ、一つ一つ乾拭きして日陰干しをしようとしたらしい。そして、腰の高さまで低くなった山の頂きのにぽっかり丸く凹みが……。

「あ……それ壁じゃないよ」

「……え？」

「うわっ！ これ埃じゃない！ きたなーい！」

中田さんはそう言われてもじっくりみると、色は灰色で表面はふわふわとしている。

「どーゆーことですか？」

取り乱した恥ずかしさが怒りに変わって、中田さんは仙人を問詰める。

「ここ、東屋から本殿へ繋がる廊下があっただ。……長年使わなかったから埃が積もったみたいだね」

それどころの話ではないが……。

「……分りました。掃除してみせます!」

そう言つと中田さんは一度外に出て、何かを抱えて帰つた来た。箱型の物体から管が伸びている。

「掃除お助け道具。掃除機です」

ジャジャーンと秘密兵器を取り出し、プラグを仙人に渡した。ここに電気が無いことなど百も承知である。

「……なんだ?」

プラグを渡された仙人は訳が分らずそれをまじまじと見る。

「仙人さんは電気を起こせると聞いたので」

もちろんちいからである。

「……は?」

「雷のことよ。体から発生できるでしょ? 昔トースターで試したじゃない」

ちいがトースターをどこから持ってきてパンを焼くとせがんだ時に、放電したことがあったのだ。

「……分かったよ」

仙人はプラグを握り、仙術で電気を起こす。それを体を伝え  
て掃除機へと送った。

中田さんがスイッチを入れると、掃除機は大きな音を立てて動  
き出す。みるみるうちに埃を吸い取っていった。

「面白いな」

仙人は電気を起こしながら感嘆する。

そして何度か圧縮された埃を捨てると、扉に行き着いた。

「おお……懐かしい。ここに来るのは久しぶりだ」

久し振りも、埃が天井までうめ尽くすぐらいの久し振りだ。

「ここは何なのですか？」

「宝物庫だ。向こうのはガラクタだが、ここのはかなり使える」

だが使わないので宝の持ち腐れである。

仙人は扉を引き、目の前に現れた幕をめくった。

部屋の中は真っ暗で、仙人は着物の袖から手燭を取り出して火  
をつける。

中田さんとちいがそつと後ろに続く。

「なんか出そうですね」

「みゃ！ そんなこと言わないでよ！」

ちいはじとつとした目で中田さんを見上げ、さり気なく仙人の

肩に登った。

「……ちい、重い」

「あ、足が汚れるのよ!」

仙人はやれやれとちいを肩に乗つけたまま辺りを物色し始めた。あながち何かが出ると言うのも間違いでは無い。物置同様付喪神が生まれている可能性もあれば、曰くつきの何かが埋もれている可能性もあるのだ。

「ここは埃が無いんですね」

「ああ、特別な結界で守ってあるから……あ、こんなところにあったんだ」

と仙人が棚から取り出したのは扇だった。一枚の大きな羽で作られており、風格がある。

「扇、ですか?」

「芭蕉扇だ。はしうせん 私がここに引越した時に鍾鈴しゅうりやうに祝いしてもらった」

「げ、あのおかまに?」

「そうだ」

仙人は羽を指でなぞり、満足気にならずいた。

「あれ……あそこにも戸がある」

ちいは前足で前方を指した。

「あつちの本殿だ」

仙人はそちらへと歩き、戸に手をかける。

「本殿？ 奥にもまだ何かあるのですか？」

「ここはもとも神社だったんだ。昔はたいそう崇められていたそうだが、今では存在すら忘れられている」

「なんの神様なの？」

「知らん。私は神道ではないからな」

「え……家主なのに」

どうでもいいだろ、と仙人は戸を開けた。その先に続くのは廊下。それを渡ると本殿へと出るのだ……が、ここも埃で塞がれている。

再び仙人はプラグを持たされることになった。

「なんでこんなになるまで放置したんですか？」

中田さんは埃を掃除機で吸い込み、前へと進んで行く。

「ん？ だって行く必要ないし。邪魔くさいし」

「そうやってあの東屋が埃まみれにならなかったんですか？」

やっと奥までたどり着き、戸の四隅まできちんと埃を取る。

「あの部屋は仙人の力で綺麗に保たれてるのよ」

ちいは自分のことのように胸を張って答えた。

「それはすごいですね」

中田さんが感心している隙に仙人は本殿へと続く戸を引いた。  
ガラガラと重そうな音がする。

「……だよな」

すぐに本殿とご対面とはいかない。埃もここ。まだここはかさが低く、仙人の身長（140センチ）ほどだった。

中田さんが溜め息について掃除機を構える。それを仙人が手で制した。

「ちい、戸と窓の鍵を全部開けて」

「は！？ 私に働けっというの？」

ちいは仙人の肩をガシガシと叩く。

「ちいならジャンプしていけるだろ。猫だし、しかも仙猫なんだから？」

それに仙人は挑むような目付きで答えた。

「そ、そりゃ私の華麗なジャンプであれくらい……」

止め金は全て埃よりちよい上。足場は無いに等しく、止め金の部分だけが辛うじて出っ張っている。

足を踏み外せば、モコモコへ真っ逆さま……窒息しかねない。

「いいわ、私の力見せてあげる！　その代わりに成功したら高級ネコ缶買ってね！」

そしてちいは仙人の返事もまたずに仙人を踏み台にして飛び出した。

「痛っ！」

ちいは手前の戸に飛び移り、前足で止め金を外すと瞬時に次へと飛び移る。

薄闇の中を黒猫が動き回る様子は、さながら忍者のようだった。

「ちいちゃんすごいですね」

「褒めると調子に乗って失敗するぞ。いつもそうやって木から落ちている」

「しないし！」

二人の会話が聞こえたらしく、ちいはクワツと牙を剥いて仙人へと突撃する。

全ての鍵開け作業が終わったのである。

「そして帰ると見せかけてえ。必殺！　テイルアタック！」

仙人目前で体を反転させ、加速がついたしつぽが仙人に迫る。  
狙いは顔面だ。

「みぎやあああ！」

が、聞こえたのは仙人の悲鳴ではなく、ちいのこの世が終わる  
ような絶叫だった……。

「ばかちい」

仙人にしつぽを掴まれプラプラと宙吊り状態で、ちいは手足を  
ばたつかせていた。

「虐待よ、虐待いい！」

半眼になった仙人はちいを中田さんへ向けて、放り投げた。

「きゃあああ！      中田さーん！      ひどい！      仙人がひどーい  
！」

グスグスと嘔泣きをきめ、中田さんにすがりつく。ちゃっかり  
肩の上だ。

「頑張ったのに、サガのために頑張ったのに」

いじけモード突入。

「はいはい。ありがと、ちいのおかげで作業が進むよ」

イジイジと文句を言っているちいを放置して、仙人は袖から先程の扇を取り出した。

「何？ 私を扇いで労ってくれるの？」

ちいがうつとした目で仙人を見上げれば、

「なんでそんなことしないといけないの」

と仙人が真顔で返した。そしてずっと扇を前に出す。

「これはこうやって使うの」

仙人はふわりと横に薙払う。そよ風が起きるぐらいのゆつたりとした動きから、突風が生み出された。

ふわりと風が埃を押し、もう一薙すると風圧に耐えきれずに全ての窓と戸が開いた。

光が差し込み、埃はそこから吹き飛ばされた。

「何……それ」

ちいはカパッと口を開け、肩を提供中の中田さんもポカンと口を開けている。

「仙人だからな。これくらい出来る」

「調度品がグチャグチャですけどね」

その通り、埃が無くなったはいいものの、置物や飾り物が無残床に転がっている。飛んで行かなかったのが奇跡だ。

「……適当に直しておけばいいだろう」

ここからは中田さんの本領発揮である。三人は一度東屋に戻り、各々必要な物を持って本殿へ。

中田さんは雑巾とバケツを持ち、雑巾がけを始める。仙人は座布団に座ってずずっとお茶を飲んでいる。ちいは三座布団の上で丸くなっていた。

みるみるうちに床が磨かれ、神社の風格を取り戻して行く。

「そーいえば。こんなだったな」

仙人はきれいになった本殿を見て、そう感想を述べた。仙人が来た時にはすでにさびれており、隆盛期の姿を見たことはなかったのだ。

「きれい」

ちいは本殿を駆け回った。東屋の何倍もあり、壊して仙人に怒られるものは何もない。

ちいはぴょいと障害物を跳び越えて、神棚の方へと走る。障害物、中田さんを跳び越えて……。

「中田さん……ここはきれいになったが、自分が力尽きていては意味がないだろう」

「……あと十分で回復します」

吹けば飛びそうな中田さん。仙人は手にある扇に目を落とした。

(いやいや、さすがにそれは)

仙人は首を降って雑念を降り払う。中田さんが可哀相だ。そして数分の後。

「復活あつ!」

と中田さんは起き上がり、夕食の準備をしますと東屋に帰って行った。

「……ちい。私たちも帰ろっか」

「うん」

ちいは助走をつけて仙人の肩に飛び乗る。

仙人は歩き出し、ふと足を止めて神棚へと体を向けた。じっと見つめ、柏手を打つ。

「これからもお世話になります」

「住み着きまーす」

二人は家主に挨拶をし、本殿を後にしたのだった。

## 仙人の楽しい仲間 その一

今日もいい天気、お昼寝日より。二人はごろごろ、ぐだぐだと一日を過ごしていた。

「サガ〜暇〜」

ちいはごろりと寝返りをうつ。

「暇だねー」

仙人もごろりと寝返りをうつた。耳を澄ませば中田さんが玄関を掃いている音がする。

働き者の中田さんは毎日玄関を掃除していた。

その音を聞きながら、うつらうつらと幸せそうに瞳を閉じていた二人は、突然跳ね起きた。

「仙人の力で感じた……」

「獣の勘で感じた……」

二人はげんなりとした顔を見合わせ、同時に呟いた。

「奴が来たね」

中田さんは鼻歌まじりで玄関の掃除をしていた。ほうきで落ち葉を掃き、花瓶の花を変える。玄関は家の顔。お客様を迎える大事な場所である。

中田さんは外から玄関を、東屋全体を眺めた。東屋本体は古い作りで奈良や平安を思わせるが、玄関は昭和の引き戸。トースターが物置にあったり、炬燵があったり、それでいて仙人が読んでいるのは古代中国の巻き物だったりと時代がごちゃまぜになっているのが仙人宅である。

（現代のキッチンが欲しいわ）

付喪神と作る料理も楽しいが、ガスコンロがあればとつい思ってしまう。ほうき片手に中田さんが溜め息をついたその時、

「うつわああ。マジで人間がいやがる。しかもおばさんじゃん！  
ヤベー面白すぎる」

明るい声が耳に飛び込んで来た。

「……え？」

振り返った中田さんが見たのは一人の青年で、この三か月人っ子一人見なかった山で見た初めての人だった。

「顔は並か……アウト」

男は値踏みをするような目付きで中田さんを見ていた。  
そんな彼を見て中田さんはこう思った。チャラいと。

「おい湘、何をしに来た」

「チャラ男はさっさと帰りなさいよ」

玄関から聞こえた二つの声に彼は片手をあげてよっと挨拶をした。

「つれないこと言っなって、瓊ちゃん<sup>けい</sup>」

仙人のこめかみに青筋が立ち、ピシヤリと戸が閉められた。

「あははっ。無駄なのに」

彼は不歓迎ムードを全く気にせずに、戸を開けて東屋に入っていた。

その後を中田さんも追う。

彼は勝手を知った様子で仙人の部屋に入り、彼女の目の前に腰を下ろした。

「勝手に入ってくるな」

仙人は不愉快この上ないと眉間にしわをよせている。

「あの、どうぞお茶です」

中田さんはすっとお茶を出し、一歩退いてその若者をまじまじと見た。

彼は茶髪でピアスをし、服装も都会を歩く若者だ。うちきを羽織る仙人とは対照的である。

ちいの名付けたチャラ男は的を得ていた。

「サンキュー。あんたけっこう気が利くじゃん」

「こいつに茶など不要だ」

「調子に乗せちゃダメよ！」

二人からここまで言われる彼は一体誰なのだろうと逆に興味がわく。

「おい瓊。俺を紹介しろよ」

ぐいっとお茶を飲んで、彼は湯呑みを中田さんに向けた。おかわりだそうだ。

「……ちつ、そいつは湘、私と同じ仙人だ。ちなみに仙名は韓湘子<sup>かんしょうし</sup>、言動全てが軽率で流行を追う馬鹿だがな」

「ひでえ。同じ師匠の下で修行した中じゃん」

「あれは最大の不幸だったな」

中田さんは言い合う二人を見てけっこう仲いいんじゃない？ と思つたが口には出さなかった。

「仙人ってサガさん以外にもいたんですね」

「他にも6人いるよな。最近集まってねえけど。なあ 瓊、じじいにみんな集めさせようぜ」

湘は肘でついと仙人をつつく。仙人はつつかれるままに傾き、ゆっくり元に戻った。

「酒は一人で飲みたい……というか師匠に会いたくない」

「ああ。説教はされるだろーな。俺も」

中田さんは師匠がどんな人が非常に気になるが、しゅんとした二人を見て踏み出せなかった。

「あ、酒で思い出した。これ、土産」

彼が指をパチンとならすと 床の上に酒瓶が現れた。  
それを見て仙人は目を輝かせる。

「幻の名酒、酒呑童子<sup>しゅてんどうじ</sup>だ」

仙人は酒瓶を両手で持って顔の高さまで上げた。

「ありがと、今晚飲む」

嬉しそうに声を弾ませる仙人は子どものようだった。

「で？ 裏は何？」

喜んでいる仙人の隣りで、冷ややかにちいが訊く。

「裏なんて言うなよ。俺はただ物を預けに」

「……私の物置は付喪神養成所では無いと何度言ったら」

「だから土産やったじゃん」

その言葉に土産をもらった仙人は黙り込む。再び彼が指を鳴らすと3つの古びた物が姿を現した。

「……今回はまた気味の悪い物を持ってきたな」

まず一つ目、市松人形。おっかつぱ頭や長髪など種類はたくさんあるが、

「ベリーショートは珍しいわね」

なかなか斬新な市松人形だ。

「だろ。俺が切った」

「馬鹿！ 呪われるぞ！」

「はっ？ 仙人が呪いを怖がってどーすんだよ」

呪いなどなんととないと。ゴーイングマイウェイ。それが彼だった。

二つ目、フランス人形。金髪の縦巻きロールに青い瞳。フリフリのドレスを着ていた。

「こいつが動き出すのを想像するだけでゾクゾクするぜ」

湘は我が子のようにその頭を撫でる。それは傍から見ればなかなか痛い絵だ。

そして三つ目、クマのぬいぐるみ。様々な布を組み合わせで作っており、ボタンの瞳に愛嬌がある。

「なんか、こいつが一番気が強いな」

不気味さよりも愛らしさが勝るそれは、どこか化性の雰囲気を感じていた。

「そいつは後ちょっとで化けるな」

湘は満足気にうなずいて、その3つの人形を腕に抱えて物置へと歩き出した。

襖を足で開けて入っていく。

「みんな〜パパだよ〜」

「気色悪い声を上げるな！」

「ママは怒りっぽいね」

ふう、やれやれと彼は大袈裟な手振りをつけて彼は物置へと消えて行った。

憤怒に悶える仙人を置いて……。

「あ、あの。仙人さん？」

部屋の隅で控えていた中田さんがおずおずと声をかける。ちいも衣の裾を引いている。

「私が……ママだと？ ふふ……ふふふ。人の物置を私物化しよつて……」

ちいは真つ黒な笑みを浮かべる仙人を見て、手を引っ込めた。

「仙人さん。どうぞお茶を……」

中田さんは新たに急須からお茶を入れ、仙人へと出した。

「ありがとう」

仙人はぐいっとお茶を飲み干し、物置へと顔を向けた。指をくいと曲げると、襖が閉まりガシャンという音がした。

「……今鍵閉まらなかった？」

「というか、襖に鍵つてあるんですか？」

二人の疑問を仙人は無視して、仙人はおかわり、と湯呑みを中田さんへ突出した。

「あの……仙人さん。聞きたいことがあるんですが」

中田さんがお茶を注ぎながら控えめに尋ねる。

「なんだ？」

仙人の反応が思ったより悪くなかったので、軽い質問を試みる。

「ケイって仙人さんの名前なんですか？」

「ああ……あれはまだ仙人になる前の名だな。仙名として何仙姑<sup>かせんこ</sup>、サガは日本に来てから名乗り始めた名だ」

仙人が気軽に答えてくれたので、中田さんは訊きたくてウズウズしていたことを質問した。

「仙人さんの師匠ってどんな人ですか？」

期待度マックスの瞳で見つめられ、仙人はうっと答えにつまる。

「せ、仙人かな」

「え？」

「ヒゲ仙人はまんま仙人って感じ。髪は白くて長いし、髭も長いしね」

ちいが補足説明をした。

「口うるさい人で、仙人の道に生きる人だったな。私に言わせると古いけど」

ちいが隣りでうんうんと頷いている。

「へえ。お会いしてみたいですね」

「外見はあれ……おばちゃんがここに来た時の仙人。本物はもっと厳めしいけど」

「ああ。なるほど」

中田さんはおじいさんに化けた仙人を思い出して、合点がいった。確かに仙人だ。

「というか、会って面倒な性格だぞ？」

「薬草語るし、ネコ缶には文句つけるし」

「人ともつと関われって言われるしな」

二人は嫌だ嫌だと首を横に振る。どの世界でも年寄りには口うるさいものだ。

「そうだそうだ。師匠は偏屈じじいだからな」

物置物色中の彼が、襖をスツと開けて割り込んで来た。仙人のかけた鍵など物ともせず……。小さく仙人が舌打ちした。

「俺だって服装を改めると何度言われたか」

「当たり前だ！」

「チャラすぎるのよ！」

「はっ、これが俺の仙道だ！」

湘は鼻で笑って胸を張る。その肩に乗っている物たちも同様に偉そうにしていた。

「……ずいぶん可愛い付喪神だな」

彼の肩に乗っていたのは小さな色鉛筆たち。12人の兄弟姉妹がいるようで、

「ほらみんな、あの人がお母さんよ」

と長女らしき赤の色鉛筆が言えば、

「わゝママ」

「マミー」

「お母さーん」

とその弟妹たちが肩の上で大合唱だ。

「湘！ 変なことを吹き込むなああ！」

頭を抱えて叫ぶ仙人を見て、彼は大笑していた。

「なんだかんだで仲いいんですね」

「……一方的にからかわれてるんだけどね」

母さん攻撃に悶えている仙人を横目に二人がひそひそと小声で話した。

「じゃ、他の奴にもお前の暮らしぶりを伝えとくから、後の奴らも来るだろうぜ」

「余計なことをするな！」

「あはは、じゃーな」

湘はおかしくて溜まらないうと瞳に涙を浮かべ、手を振って窓枠に足をかけた。ふわりと体を浮かせ、窓から出て行く。

「ママ〜元気でね〜」

「また遊びにくるよ!」

「お母さんも家に来てね」

色鉛筆たちは各々好きなことを叫んで、湘と共に帰っていった。彼の姿が山の奥に見えなくなると、やっと静けさが戻る。仙人宅は平和になったのだ。

中田さんはお茶を下げて台所へと行き、ちいは散歩をすると窓からヒラリと出て行った。

屍のように横たわる仙人を残して……。

## 仙人の楽しい仲間 その一（後書き）

ちよつと頑張りました。

仙人の友達が登場です。残り六人、順次出てくるかと思ひます。さて、今月中にあと一本書ければいいな。

## 仙人風邪をひく

ぼーっと、仙人は外を見ていた。朝の日差しが体を温める。ぼーっと、仙人は虚ろな目で外を見ていた。

「サガ、おはよー。ご飯まだあ？」

洗顔を終えたちいが、仙人にすり寄る。猫にネコ缶は開けられない。

「んー……」

仙人はゆつくり顔をちいに向ける。頬が赤い。

「もうサガ！　寝ぼけてないで、シャキツとしてよ」

「……ふあい」

生返事の仙人に、ちいは半眼になってバシッと仙人の手を叩いた。

「……ん？　熱い？」

ちいはもう一度仙人の手を触り、次に肩に飛び乗って額に手を当てた。

「重い……」

「熱い！　サガ、熱あるんじゃないの？」

ちいは肩から飛び降り、物置へと走る。

「熱なんてない」

仙人がムツとして言い返すと同時に、ちいが襖を開けて叫んだ。

「体温計いるー？　もしくは近くにあるー？」

物置は付喪神の養成所。もしかしたら体温計も紛れているかもしれない。なんたってここは中田さんも逃げ出す物の多さだ。

「はい。今行きまーす」

この山の中に体温計がいたらしく、声に続いて細い棒が隙間をぬって出て来た。

「じゃあサガの熱測って」

「了解です！」

体温計は使われることが嬉しくて堪らないらしく、スキップで仙人に近付く。

「熱なんてない……」

頬を膨らませて背を向ける仙人だが、二人に回り込まれてさらに顔を背ける。

「仙人さん、僕を啜えてください」

体温計は仙人の腕をよじ登り、肩で飛び跳ねた。仙人はイヤイヤと首を振る。

ちいが溜息をついて頭に飛び乗り、器用に体温計を掴んで仙人の口に入れた。

「十分お待ちください」

「長つ、なんで電子じゃないのよ」

「いやあ、付喪神ですから」

二人が和やかにやりとりを続ける間にも、赤い液体は上昇を続ける。ゆるゆると上がり、止まる。

仙人はその様子を目をよせて見ていた。

「そろそろですね」

「ほら、サガ見せてよ」

ちいが体温計を抜き取り、その目盛を読む。

「ちょっと、三十九度！？……熱ありまくりじゃない！」

「布団敷いて寝ましょう」

「やだ」

仙人は三角座りでぐるりと二人に背を向けた。熱のせいか、いつもの倍素直じゃない。

「ああもう！　なんでこーいう日に限っておばちゃんが休みなのよ！」

本日は日曜日。中田さんは家で家事に励んでいる。

「仙人さん。薬飲んで寝てください」

口うるさい二人を仙人は素知らぬ顔で無視する。ふてくされた子どものようだ。

「薬買ってくるから待ってて」

ちいは化け猫。その気になれば変化も出来る。

「やだ、まずい。それなら自分で作る」

はあ？　と目をつり上げるちい。仙人はゆっくり立ち上がり、ノロノロと窓に近付くと弱々しい声で呼び掛けた。

「みんな～……お願いがあるんだけど」

するとすぐに木々の間から動物たちが現れ窓辺に近付いてくる。

「仙人さんどうか……って顔が真っ赤ですよ！？」

ただの鳴き声でしかないそれが、仙人の頭で翻訳される。

「わあ、ふらふらです」

“日頃の生活が悪いからですよ”

“ご飯食べないしね”

“でもあの人間が来てからだいぶましになりましたわよ？”

“彼女が来てくれて良かったよね”

動物たちに好き放題言われて、仙人はいたたまれなくなる。

「……お前ら、心配してくれるんじゃないのか」

“心配してますって！　　そこで、頼みってなんですか？”

「……今から言う物を探って来てほしい。薬酒の材料だ。ヨモギ、サルノコシカケ、ドクダミ、イカリソウ、タマゴタケ、トカゲの尻尾、クコの実、ハトムギ……以上」

仙人がずらずらと材料を並べたてれば、

「了解です」

と全員そろって返事がくる。そして次の瞬間には彼らの姿は山の奥へ消えていった。

「……買えばいいじゃない、薬」

ちいはぼつりと呟いたが、それに仙人が答えることはなかった……。

そして十分も経つと、仙人の下には薬草や何やらがそろっていた。

「みんなありがと……元氣が出るよ」

が、仙人はカタカタ震えどう見ても悪化している。

「サガ！ さっさと作って寝なさい！」

そうちに急かされて、仙人は戸棚から薬草を煎じる道具と、先日仙人仲間の湘からもらった酒を取り出した。部屋の隅に安置してあった空の酒瓶も持つてくる。

準備が出来たところで、仙人は薬酒造りを始めたのだった。

「これと、それはすりつぶす」

仙人は朦朧とする意識で薬を潰した。それを酒瓶に入れる。

「サルノコシカケは乾燥させて……」

と言うなり仙人は左手の平に炎を出し、キノコの水分を飛ばしていく。

「ねえ、乾燥と焼くのは違うんじゃないの？」

「……水分が飛べば問題ない」

仙人はカラカラになったキノコを瓶に入れ、軽く振る。そしてまた薬草を刻み、入れる。木の実もすりつぶしたり、乾燥させたり……。…。

「どんだけ手の込んだの作んのよ！」

薬酒造りはちいがそう叫ぶくらい繁雑だった。

「材料は、ちゃんと、調理しないと……酒に失礼だ」

「変な拘りを持たないで！」

ちいの小言に辟易した仙人は、最後の薬草をすりつぶすと瓶に入れしつかり振った。瓶の半分まで酒を入れ、蓋を閉める。

「出来たならさっさと飲んで寝て……って何するつもり？」

仙人は付喪神たちによって敷かれた布団に酒瓶を抱き抱えたまま潜りこんだ。

「しばし……熟成」

「ああなるほど。今体温高いからいい感じに熟成するでしょーね」

ちいの声に刺が出て来た。仙人もさすがにまずいと思ったのか何も言わずに寝たふりをする。

だが、仙人が本当の眠りに落ちるまでさほど時間はかからなかった……。

二時間後、首筋に冷たいものを感じて仙人は目を覚ました。首にタオルが添えられている。

仙人は酒瓶を抱え横を向いて寝てしまったので額に氷を乗せられなかったのだ。

焦点の合わない目で周りを見ると、付喪神たちがタオルを桶に入

れていた。

仙人はゆっくり起き上がり、首筋のタオルを額に押し当てた。

（冷たい……）

そして仙人は抱えている瓶に視線を落とし、ゆっくり水音が出るように振ってみる。

「……杯」

仙人がぼつりと呟くと、徳利の付喪神が杯を持ってやってくる。屋根の上で昼寝をしていたちいもやって来た。

「やっと完成？」

「……そう」

仙人は杯に薬酒を並々注ぎ、ゆっくり飲み干した。ほっと息をつく仙人は満足そうだった。

「ん、いい出来だ」

仙人はもう一杯と杯に酒を入れて飲み干した。

ちいがゆっくり近付いて、床に置かれた杯を舐める。その瞬間全身の毛が逆立った。

「苦っ！」

「薬だからな。だが最後に甘みもあるだろ？」

ちいはしかめっ面で舌を出している。

「そんなの分かんないもん！」

「そんな少しだけ飲むからだ」

「……なんかサガ元気になった？」

「薬酒のおかげだな」

胸を張る仙人の肩に登って、ちいは仙人のおでこに手を添えた。

「十分熱い。さっさと寝なさい」

「ちっ……」

仙人は忌々しげに舌打ちをして布団に潜り込む。ちいはそれを見届けると仙人の頭の横で丸くなった。

「……気が散るんだけど」

「気のせいよ」

「見張られている気がするんだけど」

「気のせいよ」

仙人はぷうと頬を膨らませ、付喪神に冷たいタオルを額へ乗せてもらうとふしゅーと空気を抜いた。

すぐに仙人はうとうととまどろみ始め、深い眠りへと落ちていった

……。

翌朝。

「復つか〜っ！」

布団の上には元気に飛び跳ねる仙人がいた。そばに驚き顔の温度計と呆れ顔のちいがいる。

「すごいですね〜。完全に熱下がってます」

「ありえないわ。そんなにあの薬酒効くの？」

「仙人の力だ」

自信ありげに仙人は断言し、日々の生活に戻った。定位置での読書だ。

（仙人の力あるならそもそも熱出さないでしょ）

ちいは心の中で溜め息をつく。それと同時に強烈な空腹を感じた。思えば昨日の朝から何も食べていない。

「サガあ、お腹すいた！」

ピョンと跳ねてサガの目の前に座る。

「もうすぐ中田さんが来るだろ」

「そう思ってたんだけど来ないの。サガ起きるの遅かったからもう昼なんだよ?」

ちいが前足で床をダンダン叩いて抗議する。仙人が窓の外を見ると、確かに太陽は南の空にあった。

「中田さんが遅刻なんてなかったのに……鳥を飛ばすか」

仙人は立ち上がると袂からホイッスルを出し、外に向けて吹き鳴らした。

集ごう！ の合図である。

ほどなく一羽の小鳥が窓辺に留まった。

「もう熱下がったんですか?」

この小鳥はその昔に仙人によって力を与えられ、人語を操るようになったのだ。そしてとても山の連絡網は速い。

「ああ、平気だ」

「それで、どうかしたんですか?」

「ちょっと中田さんの様子を見てきてくれるか?」

「ああ、あの家政婦さんですね。わかりました」

小鳥はこくりと頷くと青空へと飛び立った。

「おばちゃん大丈夫かなあ」

「事故にあつてなきやいいけど……」

「ご飯……」

「え、そっち？」

そして二十分後。

「仙人さーん」

バサバサと羽音をさせて小鳥が帰って来た。

「どうだった？」

「家政婦さん、寝込んでました」

「えっ!？」

二人が同時に聞き返す。

「昨日から熱を出したらしいです」

「……サガのがつつたんじゃないの？」

「いや……私が中田さんのをもらったのかも」

「家政婦さんは行けなくて申し訳ないとおっしゃっていました」

仙人はしばし考えるそぶりを見せ、すっと立ち上がった。

「どーかしたの？」

「薬酒まだ残ってるから、あげようと思って」

そう言って仙人は枕もとに置いてあつた酒瓶を持つ。

「いいね……で、なんで私にくくり付けるの？」

「慣れてるでしょ？」

ちいは家出の度に何かを背中にくくり付けて帰ってくるのだ。

「……分かったわよ。行くわ、ご飯のために」

「うん。中田さんによろしくね。無理させちゃだめだよ」

ちいはひょいっと窓枠に飛び乗ると、振り向いた。

「ちゃんとお見舞いして来るもん」

「はいはい。いつてらっしゃーい」

ちいはひらりと外に飛び降り山を駆け降りて行く。

小鳥と仙人はちいが帰るまでの間、久し振りのおしゃべりを楽しんだのだった。

## 仙人風邪をひく（後書き）

うん。なぜこの話は筆が進まないのだろう。

そして、なぜ文章が安定しないのだろう。粗いよなあ……。

作者は反省中。

うん。仙人にすがってみよう！

## 仙人の友だち

しとしと。じめじめ。

ムスツとした顔。

窓から顔を覗かせている二人は、不機嫌そうな顔で中田さんを待っていた。

「ほんと、嫌になるよね」

「湿気でべたつく」

ちいに言わせればなんか体が怠く、仙人に言わせれば本が湿気でカビる、中田さんに言わせれば洗濯物が乾かない季節。梅雨だ。

しばらく雨のカーテンを眺めていると、それをかき分けて中田さんがやってきた。合羽を来て自転車をこいで来た中田さんは、バサバサと水滴を払って合羽を軒先につるす。

「おばちゃん」

暇を持て余したちいが玄関まで中田さんを迎えに行き、

「中田さん」

と、同じく暇な仙人は声の調子を真似た。面倒なので動かない。

「今お茶淹れますね」

中田さんは割烹着を着、お湯を沸かした。火は豆炭の付喪神にお願いし、ヤカンが戸棚から発掘したものを使う。

「おばちゃん。次のネコ缶はカツオがいいなあ」

ちいが沸騰を待つ中田さんの足元にすり寄っておねだりをする。  
最近マグロが続き、さすがに飽きて来たグルメなちいである。

「カツオ……？ 鰹節でも買つてこようかしら」

中田さんは意地悪そうな笑みでちいを見下ろした。マグロにカツオぶしをかけてもカツオにはならないが……。

「それなら丸ごとがいい！ 自分で囓るから」

暇つぶしに言い合っていると、お湯が沸いた。中田さんは戸棚から茶葉を出して急須に入れる。

「中田さん。お茶一つ追加」

急須にお湯を注いでいると、部屋から仙人の声が飛んで来た。中田さんはわかりましたと答えて湯呑みを一つ増やす。

「……誰の分？」

ちいの対仙人用アンテナに引っ掛かるものはなかったので、仙人仲間が遊びに来たわけではないはずだが……。

「ねえサガ」

確かめようとちいが部屋に入ると確かに人がいた……が、ちいは彼女が人ではないことを知っている。

「うわ……沙夢<sup>さゆ</sup>」

「相変わらず失礼ね、ちい」

沙夢と呼ばれた女性は、二十代前半の容姿をしており。大人っぽいワンピースを着ていた。

「こんにちは。お茶でもどうぞ」

中田さんはお茶を出し、沙夢はずっと一服。

「仙人なんですか？」

興味津津といった風に中田さんが、尋ねる。

「ううん、私は座敷わらしよ」

「座敷わらしですか？」

それにしてもイメージと違うなと中田さんはまじまじと彼女の姿を見る。

イメージで言えばこの間来た仙人もだったが……。

「あの、触ってもいいですか？」

「いいけど？」

中田さんは子どものように目を輝かせて沙夢の肩を触り、その感触に驚いていた。毎日仙人、化け猫、付喪神に囲まれていれば行動

も大胆になる。

「私は実体化できるの。座敷わらしの時は浮いてるよ」

「座敷わらしってすごいですね」

とその時、襖がガタガタ音を立てて揺れる。三人と一匹はそれに視線をやった。

襖の向こうは物置である。

仙人は仕方ない、と呟いて立ち上がり、襖を開けた。

「沙夢」

開くと同時に物が雪崩のように部屋に入って来た。彼らはわらわらと沙夢に纏わりつく。

「やはりもののけどうし落ち着くのか？」

「というか、また増えてるね」

ちいさな付喪神から大きな付喪神まで、沙夢を囲んで離さない。

「えっとー、もう少し離れて欲しいな」

沙夢が一声かけると、付喪神たちはぱつと離れた。

「沙夢さん、元気でしたか？」

「ストーカー野郎は死にましたか？」

「こないだ唐傘スケスケが会ったって」

「沙夢さんのアパートに遊びに行きたいです！」

離れた途端今度は口が動き出す。

「連れてくから、遊ぶから。ちょっと待ってね」

沙夢は付喪神たちを黙らせて、仙人と向き合う。その顔つきは真剣だった。

「今日はね、お願いがあって来たの」

仙人は目で続きを促す。

「しばらくここに泊めてくれない？」

「ああ……好きなだけいろ」

仙人はその理由がなんとなく分かって、遠い目をする。この友人はなかなか苦労しているのだ。

「外国に逃げてもいいんだけど、知り合いいないし……むしろ奴のテリトリーだし……」

沙夢の呟きを、仙人は聞かなかったことにした。目が据わり、頬がひくついている。

（ああ……あの男はまだ諦めていないのか）

沙夢には二百年以上前から求婚している男がいる。沙夢がぶちぎれること幾万回。しかし懲りずに現在も求婚中というタフな男だ。

「私、神様に疎まれるようなこと……」

「いや、そんなことは……」

仙人が言い淀み、ちいは同情のまなざしを沙夢に向けた。沙夢はがばつと顔をあげて、仙人の顔をじつと見る。

「サガ、今日は飲むわよ」

「ああ、いい酒を出してやるよ」

沙夢はうん、と大きく頷くと付喪神たちを見下ろす。

「じゃあ遊ぶわよ！ ストレス発散しないとやってられないわ！」

沙夢は目を閉じて集中する。すると徐々に光が体から溢れ、完全に霊体となった。見た目の変化は少し色素が薄くなりふわふわと空気に流されているぐらいだ。

「手が通り抜けます！」

中田さんが沙夢の肩に手を置くが感触はなく、掴むことも出来ない。い。

「座敷わらしだからね。ここは仙人の力が満ちてるから普通の人も見えるのよ」

沙夢はふわりと浮いて窓から外へ出て行く。その後が続いて付喪神たちがゾロゾロと壁をよじ登る。

「イダッ！」

屏風の付喪神が頭を窓枠に打ち付ける。行灯も通れそうにない。

「……あんたたち、玄関からでは？」

ちいは呆れ顔で顎をしゃくる。体は丸くなり寝る態勢だ。とつと追い出して眠りたいようだ。

「そうだった！　行つて来ます！」

大型の付喪神たちはドタドタと玄関へと走っていった。

「沙夢さんって、可愛い座敷わらしですね」

中田さんが湯呑みを片付けながら目元を和ませる。

「キレると怖いけどな」

仙人が少し遠い目をして言った。

「沙夢さんが怒った時……ですか」

中田さんは窓から浮遊している沙夢を見た。なかなか想像がつかない。

ふわふわ、沙夢はけらけらと笑って楽しそうだった……。

そしてその日の夜。

燭台の付喪神が灯す明かりの下、月を見ながら二人は酒を飲んでいた。

「もう、どーすればいいの？　この127年、ずっと戦ってきて、一度も勝てたためしがないの」

つらつらと話す沙夢に、仙人はうなずきながら酒を継ぎ足す。

「あいつ、私は同じ座敷わらしなんて認めない。あれは化け物よ、魔人よ！」

沙夢は並々注がれた杯を一気に飲み干すと、ダンツと荒々しく置いた。目が据わり、頬が上気している。ちいはうつらうつらとしながらその様子を見ていた。ちいの杯に入っていたマタビ酒は既に空だ。

「……そんなに嫌なのか？」

「嫌よ。毎日毎日用も無いのに家に来るし、薔薇はじゃまだし、うるさいし……もうっんざり」

「奴の行動には問題があるが、奴自身は悪い奴では無かったぞ？」

その言葉に沙夢の目がつり上がる。

「会ったの？」

「ああ。一年前に尋ねて来た」

「それで？」

「……お前について話しをした。奴は本気で、お前と結婚して幸せにしようとしていた」

沙夢はひっと呻き、顔をひきつらせ、杯を持つ手がガタガタと震えている。

「なんでちょっとあいつの肩を持つてるのよ！」

「いや、私も初めは諦めるよう説得を試みたのだが……奴の思いに心打たれた節が」

「サガ！ 惑わされないで！ あいつはそうやって味方を増やしては私を追い詰めるのよ！」

サガは結婚包囲網が着々と形成されてゆく様が目に見えて、乾いた笑みを浮かべた。かく言う仙人も、もう諦めて結婚しろと思い始めているのだ。もちろん口には出さないが。

「陰湿さがないぶん、ストーカーとやらよりはマシじゃないか」

「陰湿さより、あの目茶苦茶さが辛い。精神力全部持ってかれるのよ」

今までの沙夢の愚痴から彼の沙夢に対しての目茶苦茶さは多く知っていたが……。

（だが、話した感じではまともな奴だったんだがな）

仙人は酒を一口飲み、娘さんを僕にくださいと言わんばかりの様子だった彼を思い出す。友を思つて少々意地悪を言つたが、彼は引かなかった。

「まあ、飲め。しばらくあいつのことは考えるな」

沙夢は注がれた酒を煽ると、コロンと横になった。

「はあ……なんで、あんなにしつこいのよ……あの魔人……」

うつらうつらとまどろみ始めた沙夢に仙人は掛け布団をかけた。

「だがなあ……」

仙人は微笑を浮かべてその寝顔を見ている。

「来なければ来ないで、寂しくせに」

沙夢は彼を嫌いと言うが、そのわりには茶を出したり旅行に行ったりと、よく付き合っていた。本人の気持ちがどうだったかは問わないが……。

仙人はふわあとおくびをして沙夢の隣りで横になる。

（明日は森の仲間も呼ぼう……）

そして翌日。

三人は中田さんの声で目を覚ました。

「みなさん……片付けてもよろしいですか？」

日の光でみた仙人の部屋はグツチャリとしていた。杯やら肴が散在しており、そこに布団が乱入している。

「うう……眠い」

仙人は体を起こしてしばしばーっとしている。沙夢はパチリと目を覚まして顔を洗いに行った。羨ましい目覚めの良さだ。

「サガあ……頭痛い」

ちいはぐつたりと部屋の隅で伸びていた。完全に二日酔いだ。

「サガあ、ご飯食べよ」

ちいとは対照的にシャッキリした沙夢が仙人の腕を取って立ち上がらせた。

「……元気だな」

仙人は連れられるままに顔を洗い、きれいになった部屋で食卓につく。

「わあ、和食とかテンション上る！」

沙夢は白ご飯に焼き魚、味噌汁という朝食にテンションを上げていた。沙夢の朝食はパンが常だったのだ。

「いただきまーす」

パクパクと食べる沙夢。トロトロ食べる仙人。そしてちいは水を舐めていた。

朝食も終盤に差し掛かった時、沙夢の肩がピクンと跳ね、徐々に顔が青ざめていく。

「な、なんで？」

沙夢は残っていた味噌汁を飲み干して、箸をカタリと置いた。それを3人が不思議そうな顔で見る。

沙夢はバツと窓の外を見る。3人も釣られて外を見ると……。

「なんか、こっちに来てる？」

「いやああ！　なんであいつここがわかんのだよ！」

沙夢が立ち上がって、絶叫する。顔は驚がくに歪んでいる。

「沙あああ夢うううう！　愛してるよおおお！」

次の瞬間には、窓から人が入ってきた。弾丸のようなスピードで入り、沙夢の一手前で優雅にターンを決めて止まる。

噂の男、本名不詳の薔薇魔人だ。無論薔薇のお化けではなく、彼も立派な座敷わらしなのだが……。

「まあ、外国の方ですか!？」

中田さんが口到手をあてて驚きを表現する。

そう、彼は座敷わらしでも外国、フランス生まれ。その性格から祖国を追われ、昔旅先で出会ってからしつこく求婚している沙夢が住む日本に移住してきた迷惑な男だ。

「沙夢、突然消えたりして心配したじゃないか。婚約者である僕に内緒でお泊りとは……サガさんの家じゃなかったら……相手を蹴り殺してところだよ」

最後の一文には聴衆をびびらせるような殺気がこもっていた。だが沙夢はそんなものに怖気づいたりはいしない。逆に悪者が後ずさるような目つきで彼を睨んだ。

「お前……私がなぜここに來たか、わかっているのか？」

絶対零度の冷たさをもった声に、慣れっこの薔薇魔はにっこりと笑って流す。

「僕をためすため。僕が愛の力で君を見つけられるか、心配だったんでしょ？」

「んなわけあるかああ!」

沙夢は怒号一発、彼に回し蹴りをお見舞いする。彼は壁を通り抜けて空へと飛んで行き、すぐに戻ってきた。

「あっはははは! 全く沙夢は照れ屋さんだなあ!」

懲りるなど頭の辞書にはない彼に、沙夢はわなわなと怒りに体を震わせる。

「……たしかに、お怒りになると性格が変わられますね」

部屋の隅に避難した三人のうち、中田さんがぼつりとそう言った。

「ほんとにまだ諦めてなかったんだ……沙夢、可愛いそう」

「だが、いきいきしてるだろ」

「ええ」

「まあ、ね」

それが仙人が反対しきれなかった理由だった。沙夢は彼と居る時が一番元気がいい。

「サガさん！ 一晩中僕のいいところを沙夢に吹き込んでくれたかい？」

突然話を振られて、仙人はあいまいに笑みを浮かべ、

「まあ、ちよつとは」

とごまかした。

「そうかいそうかい。沙夢、僕はいいやつだろう。こんな僕に求婚される君は世界一の幸せものさ！ さあ、今から協会に行こう！ なんなら神社でもかまわないよ！」

「サガ！ 頼むから助けてくれ！ 私は嫁に行きたくない！」

手を掴まれ引き寄せられ、現在羽交い絞めにされている沙夢が仙人へと手を伸ばす。攫われる少女の図が出来ている。

「うん……」

友人がピンチであることは重々承知だが、仙人としては二人がつついても一向に構わないわけで……。

しばらく悩むそぶりを見せた仙人は、決心のついた顔で一つ頷いた。

「サガ！」

「沙夢、一つ貸し」

仙人がパンと柏手を打つと、沙夢から薔薇魔人が弾け飛んだ。そして今度は小さくパンパンと手を鳴らすと、薔薇魔人を閉じ込める檻が出現した。もちろん座敷わらしでも閉じ込められる特製ものだ。

「サガさん！？ これは何だ！」

「ありがとうサガ！ 私、逃げるね」

そう言うなり沙夢は猛烈な勢いで窓から出て行った。すぐに空の彼方へと見えなくなる。

「何で僕の邪魔をするんですか！」

「……たまには、男らしく懐が深いところを見せてはどうだ？ たまに会うからこそ、お前のよさを分かってくれるのではないか？」

仙人は檻を揺らす薔薇魔人にうまく言葉を選んで諭す。さすがに、友人が不憫だった。

「そうか……うむ。そう言われるとそうだね。では明後日に花束を持って尋ねるとしよう」

つまり、今日一日は我慢すると彼は言った。

「いや……そのプレゼントとかも、もっとたまにするから価値があるかと」

「何！？ 今まで誠意をこめて贈っていた花束などは裏目に出ていたのかい？」

「ああ……かなり」

その言葉に薔薇魔人は檻の底が抜けるのではないかというほどへこんでいた。

「反省……」

しおしおとしよげる薔薇魔人に仙人は非情にも追い討ちをかけた。

「沙夢を嫁にしたければもっと男を磨け、傍若無人の男にも女々しい男にも沙夢はやらん」

グサツと薔薇魔人の心にその言葉が刺さったことを確認すると、

仙人はパンツと柏手を打ち、その瞬間檻は忽然と姿を消した。  
仙人は満足そうに自分の席に座りなおし、朝食を再開する。

「いやいや、ちょっと待ってよサガ。あの薔薇バカはどこ行ったの？」

今までじつと成り行きを見ていたちいが恐る恐る尋ねた。

「何、ちょっといずこかの空間に閉じ込めただけだ。時がくれば自然と出られるだろう」

仙人は焼き魚を口に運び、口元に微笑を浮かべた。

（あ、ご飯時じゃまされたのに怒ってたわけか）

ちいは半目になって、自分も中断していた朝食に目をやった。水しかない。

「おばちゃん、ちょっと元気になったから食べ物ちょうだい」

「では、カツオの猫缶を開けますね」

と、中田さんが立ち上がって台所へと歩いて行く。

嵐が去って、仙人の家に平和が戻り始めていた……。

## 仙人の友だち（後書き）

うすうす感じていた。

やっぱり、ケータイで書くよりパソコンで書く方がイイかも……。

感想とか、いろいろお待ちします。

## 仙人の楽しい仲間 その二

ミーンミーンと蝉は自分の存在を主張し、照り付ける太陽光が床に跳ね返って目に染みる。

夏。

仙人と猫は溶けたアイスのように床にへばりついて……。――。

「……暑い」

床に俯せに伸びたちいが喘ぐ。黒猫は見ているだけで暑い。

「暑いな」

仙人は薄い着物に衣替えをしていたが、それでも暑いものは暑い。

「クーラー」

「あるわけないだろ」

「扇風機」

「……あの物置から探せ」

ちいは物でこった返した物置を頭に浮かべ、うんざりした顔で首を横に振った。なぜ涼しくなるために汗をかかなければいけないのか。

「うちわは？」

「芭蕉扇はしうせんならあるが、飛ばされるぞ」

仙人はちいが空を飛ぶ様を想像してクスクスと笑った。

「ろくなものがないね」

「気合いで乗り切れ」

気合いを口にする仙人はだらつとしているが……。

「ちいちゃん、仙人さーん。かき氷が出来ましたよ」

元気な声と足音に二人はガバツと跳ね起きた。目がキラキラと輝いている。

「今日も暑いですからね」

かき氷をお盆に乗せた中田さんが部屋に入ると、ちゃぶ台の前でちよこんと座った二人がいた。

「かき氷」

「最高だな」

赤いイチゴのシロップがかかったかき氷を仙人は満面の笑みで口に運ぶ。

ちいはかき氷に顔を突っ込みシャリシャリと至福の時を味わっていた。中田さんも美味しそうに食べ、キーンとくる頭痛を感じていた。

今日も3人、和やかな時を紡いでいた時、ちいの耳がピンと立ち、

仙人が勢いよく振り向き窓の外を凝視した。その様子に中田さんが首をかしげる。

「瓊<sup>けい</sup>ちゃん。遊びに来たわよ」

艶やかな声が東屋に響き、二人は背中に寒気を感じた。瓊は仙人の昔の名前。それを知っているのは同じ仙人だけだ。

「はい」

来客の気配に中田さんがいそいそと出て行く。二人は顔を合わせ、それから部屋の外へと顔を向けた。その表情は夕食に嫌いなものを出された時と同じだ。

「あら。本当に人間を雇ったのね。ちんちくりんにピッタリのパツとしない人間なこと」

おほほと高笑いとともに部屋に入ってきたのは、長身の女。遊女のように着崩した着物から肩と胸の谷間が見え、髪は横髪が長く、珠を通してたらし、残りの髪は肩の辺りで切って外に跳ねさせていた。

真っ赤な口紅が妖艶さを際立たせ、まつげは瞬きの度に風を起こしそうなほど長い。そして泣き黒子を持つその目は流し目をする度に男たちを虜にする。

まさに背が低く童顔の仙人とは対極に位置する人物だ。

「今すぐ出て行け」

苦々しく仙人は吐き捨てるが、彼女は無視しちゃう台の、しかも仙人の真ん前に座った。

中田さんが青筋の浮かんだ顔でお茶を入れて来ますと立ち去った。熱いお茶を入れてくるに違いない。

「で、何をしに来たんだ？」

かき氷をつつきながら仙人は問う。用事を済ましてとつと出て行って欲しい。彼女は手に持っていた扇を広げ、口元を隠して答えた。

「ん、湘が貴女のところに人間がいるって騒いでたからあ……暇つぶしに来たの」

仙人はスプーンをぐつと握り締めた。こめかみに青筋が浮かんでいる。

（あのチャラ男め。余計なこと言いやがって）

妖艶な笑みと無表情がぶつかりあっているところに中田さんがお茶を持って来た。

「どうぞお茶です」

トンつと置かれたお茶からはユラユラと湯気が立っている。

「え、私もかき氷がいい」

「黙れ鐘鈴。飛ばすぞ」

仙人はどこからともなく芭蕉扇を取り出し威嚇する。

「それ私があげたやつじゃない。偉そうに言わないの、おチビちゃん」

「女男に言われたくない！」

「二人ともうるさい！」

3人が一様に睨み合い火花を散らす中、中田さんはパチクリと目をしばたかせた。

「この人……男なんですか？」

「当たり前だ。八仙の女は私一人だからな」

「でもこんな女が私たちの紅一点なんてありえないじゃない？だから私が華を添えてるのよ。どう？私のほうが何倍も女らしいでしょ？」

魅力的な流し目をされて、中田さんは答えに詰まった。それに仙人が視線で抗議する。

「ケバ男のくせに……」

横からちいが小さく呟いた。そのセリフに中田さんは吹き出しそうになる。確かにそのあだ名は的を射ている。

彼女改め彼の顔が引きつり、きつとちいを睨んだ。

「ちいちゃん。膾斬りにするわよ」

「何よ、その胸だって偽物じゃない」

「偽物じゃないわ！ 自分の体よ！ 仙人は何にだって化けられるの」

「結局本当の姿じゃないじゃない！」

口喧嘩を繰り広げる二人に仙人は溜息をついて、面倒臭そうにケバ男を指した。

「これは八仙の一人漢鐘離<sup>かんしゅうり</sup>で、呼び名は鐘鈴。と呼ばないとキレる。見てのとおりおかまだ」

「瓊、あんたは一言余計なの」

「で、こつちが家政婦の中田さん」

仙人はサラリと無視して中田さんを紹介する。そのうちにケバ男の着物の裾にちいが噛み付いた。

「この化け猫！ 刺すわよ！」

鐘鈴は扇を閉じて狙いをすます。

「やだ」

ちいはヒラリと飛び退き、ベーと舌を出して走り去って行った。

「……鐘鈴。本当に何しに来たんだ」

「ん？ 言っただじゃない、あんたの顔を見に来たって。後、巖<sup>げん</sup>が

少しは顔を見せろってさ」

その名に仙人の顔が引きつる。

「巖さん？」

「私の師匠だ」

「ちなみに私の弟子よ」

「……え！？」

話に聞けば仙人の師匠は厳格な人だそうだ。そんな人がこのおかまを師匠と呼ぶ姿が想像出来ない。

「今ではじいさんになったけど、昔はいい男だったわ」

「師匠によればこいつは昔は普通に男で立派な仙人だったらしい。この姿になってからは、師匠は死んだと言っている」

「つれないわよね。巖ちゃん」

「それを言つと殺されるぞ……」

「怒った顔も可愛いわ、色気のないあんたと違って」

仙人は何を言っても無駄だと首を横に振った。

そして突然鐘鈴は仙人の顔を掴み、妖艶に笑う。

「いいこと思いついたわ。今からあんたを女にしてあげる」

そう言って笑う鐘鈴の顔は獲物を狩る肉食動物のものだった。

「な、何をする気だ」

鐘鈴は扇を広げ一薙すると、きらびやかな箱が現れた。

中田さんは目を見開き、仙人は逃げようとするが着物を引っ張られて座らされた。その前に鐘鈴が座り、三段重ねの箱を開くとその中にはたくさん化粧品がある。

「うわゝ、すごい数ですね」

「美しくなるにはこれぐらい必要なのよ。瓊、じつとしてなさいよ」

鐘鈴が人さし指で仙人の額を小突くと、仙人はピタリと動きを止めた。

やられたと表情が語り、その後観念したのかされるがままになる。鐘鈴は白粉を上質な化粧筆でぬり、アイシャドウをぬる。色は仙人の服に合わせてピンク系を選んだ。

「お目め拡張」

アイラインを引き、目尻に力を持たせる。そこそこ長い睫毛をカールし、マスカラで増量。心なしか目が大きくなった。チークではんのりと肌に朱を入れ、優しいピンク色の口紅を引けば……。

「あんだ、誰？」

水を飲みに来たちいが口をあぐり開けるような大変身を遂げる。

「瓊ちゃんよ。うふふ、私のメイク術はすごいでしょ」

「……詐欺じゃん」

「うるさい」

目がパチクリとし、動く唇は艶やかに光っている。可愛い顔に拍車がかかった。化粧をしても大人の美しさは獲得できなかったらしい。

「可愛いですよ仙人さん！ 明日からメイクしましょう！」

「……めんどい」

「こら瓊！ 女の子が化粧を面倒臭がってどうするのよ」

「ふんっ」

男に言われるのは心外だと仙人はそっぽを向く。鐘鈴はそんな仙人の頭をぐりぐりと撫でて言った。

「十分楽しませてもらったから今日は引き上げるとしましょうか」

「えっ、これどうすればいいんだ？」

「ん？ ずっとそのままでもいいねば？ 大丈夫、私の化粧はちょっとやさつとじゃ崩れないから」

艶やかな笑みを浮かべて扇を一払いすると、鐘鈴の姿は風とともに消えていた。

「どうすればいいんだよこれ……」

そして数分後、メイク落としを買いに中田さんが自転車で爆走することになるのだった……。

仙人の楽しい仲間 その二（後書き）

わかってきた。私は季節が変わらないとこの話を書かないんだ……。ん、あと5にんいるんだよね、仙人。ちよつと欲張りすぎたね！では、今度は晩秋ですかね？

## クリスマス

寒い寒い冬だ。一晩中降り続いた雪はやみ、獣の足跡が残る雪が仙人の家を囲っていた。全ての音が雪に吸収されたような静けさの中に、高い声が響いた。

「さーむーいーいー！」

家の中ではちいが丸くなつて震えていた。よほど寒いのか歯の根も合わない。

「ちよつと待つて。今こたつを入れるから」

仙人は白い息を吐きながらかまどまで行き、火箸で火種を持ってきた。

仙人の家は山奥で、電気どころかガスも水道もない。冬場は毎年火鉢と掘ごたつで過ごしている。

「おはよーござえます。仙人さん。今日もあつしが頑張つて燃えるんで安心して暖まってくだせえ」

火種は豆炭の付喪神で凛々しい眉に眉間のしわが印象的な義理堅い漢だ。

仙人の家には現代社会に居辛くなつた付喪神が多数住んでおり、ライフラインの全てを担っていた。

仙人が火鉢をこたつの中に入れると、ちいはさっそく火鉢に寄り添った。

「極楽」

仙人もこたつに入って足を伸ばした。そしてこたつの上のみかんに手を伸ばす。

「蹴つても知らないからね」

「そんなことしたら噛み付いてやるもん」

「少しはおしとやかになりなよ」

「嫌」

しばらく軽い言い合いをしたあと、ちいは体が暖まったのかひよっこりこたつから顔を出した。すぐ隣りには仙人が座っている。

「ねえサガ。プレゼントちょうだい」

「は？」

みかんを剥いていた仙人の手が止まった。

「プレゼントよ。サガは今日が何の日か知らないの？」

みかん剥きを再開しつつ仙人は答えた。

「知らない」

「クリスマスよ、クリスマス！」

「……クリスマス？」

みかんを口に運びながら首をかしげた仙人に、ちいは小さく溜息をついた。

「人間の文化よ。十二月二十五日にサンタがいい子にプレゼントをくれるの」

「いい子？」

「いい子でしょ、私」

いい子以前に子どもといえる年齢か、と仙人は心の中でつつこむ。

「……そのサンタって誰？」

「赤い服を着た、白く長い髭のダンディなおじいさんよ。クリスマスの夜にトナカイがひくソリに乗って飛んで来るの。家には煙突から入るのよ」

「……空を飛べるなんて、トナカイってたいした生き物だな」

「そこじゃないでしょ！」

ちいは少しふくれてつつこんだ。

「じゃあ不法侵入？」

「サガ！」

仙人はちいの剣幕に押され、笑ってごまかした。

「冗談です……じゃあそのサンタを待ってれば？」

「……そんな人いるわけないじゃん！」

ちいは体を起こすと前足でダンつと床を叩いた。話の急転に仙人は目を丸くする。

「だからお世話になった人にプレゼント送るのよ！」

堂々と自分解釈。

事実が少々ねじ曲がっているが、仙人が気付くはずもない。

「……お歳暮のようなもの？」

「そう」

と断言しつつ、心の中ではいや違うだろ、とつつこんだ。

（ふーん。お歳暮かあ）

仙人がお歳暮という文化を知ったのは数十年前。仙人仲間の一人が怪しげな壺を送ってきた時だ。

「仙人は私にたくさんお世話になってるでしょ」

「まあ……確かに」

食料調達や、目覚時計、暇つぶしなどでお世話になった気はする。

「じゃあなにか探すよ」

仙人は名残惜しそうにこたつから出ると、隣の部屋へと入った。古今東西の謎の物品が置いてある物置だ。

そしてそこは、中田さんが逃げ出すぐらい混沌としていた。壺、箱、人形とが織り成す壁。触れてしまえば崩れてしまいそうなくらい危うい均衡を保っている。

（ちにプレゼントね。ネコ缶じゃだめかなあ）

仙人は手当たり次第に箱を開けては、閉じた。

（ろくな物が無いな）

これらのほとんどは拾い物や他の仙人が置いていった物だ。この中でも特に念の強い物は長い時を経て付喪神となるのだ。

（ん？ あ、これいいかも）

仙人は箱からいいものを取り出すと、部屋へと戻った。

「ちい〜」

期待に目を輝かせて首を起こしたちいの前で、仙人はそれを振った。

「な、何よそれ。そんな物で、私が、喜ぶと……にゃ！」

ちいは目の前で誘惑するような動きをするそれについて手を伸ばした。

猫じゃらし。その魅惑的な動きに全ての猫が病み付きになる、別名エノコログサ。それをゴムで作り、取っ手をつけた愛猫家の必需品だ。

「猫好きのあいっにもらっというてよかったな」

「こ、こんなのプ、にゃ、プレゼント、ににゃん、嬉しくないもん！」

仙人がちいの頭上で猫じゃらしを振ると、ちいは後ろ足で立つて追いかける。

「みゃく、届かない！」

必死に前足を伸ばすちいが可愛くて、仙人は立ち上がってさらに高いところで猫じゃらしを振った。

「ほーらほーら」

「にゃー……って、いい加減にせい！」

怒号一発猫キック。

「あうっ」

突然の攻撃に仙人はうずくまった。そして脇腹をさすりながら立ち上がる。

「まじめに私へのプレゼントを探してよ！」

「……ちえ、つまんない」

「サッガッ。次は噛み付くよ」

全身の毛を逆立てて、ちいは怒っていた。

「はいはい。じゃあちゃんとしたものあげるから。ちょっと後ろ向いて」

「いいものじゃなきゃ嫌だからね」

ちいはくると後ろを向いた。尻尾がそわそわと揺れている。

（なんだろう。首輪かなあ。ネックレスかなあ。キラキラした物がいいな……ん？　なんか尻尾が……）

「ちい。もういいよ」

ちいが前を向くと、にこにこ顔で仙人が座っていた。

「何くれた……」

目の前には何もない。首を見てもない。だが尻尾の先に赤い物が見えた。

「うわっ。かわいいリボン」

ちいは尻尾の前に出して触る。赤いリボンの真ん中にはちいが

好きな光る石が入っていた。

「そのリボンをして化けるとね……」

「もしかして耳とか引つ込むの？」

というなりちいはドロンと人型を取った。

「いや。頭の上で大きなリボンになる」

「へ？」

可愛らしい顔立ちに肩にかかるほどの黒髪。頭の上には赤い大きなリボン、左右には猫耳がのぞいている。

「何その無駄なかわいさ！てか、さむっ！」

人に化けたとはいえ、一糸纏わぬ姿だ。ちいは猛烈な寒さに身を震わせて、猫に戻った。

（毛皮ってありがたいわ）

「気に入った？」

「う……」

喜んでいる姿を仙人に見られるのは癪だった。

「気に入ってあげるわよ」

ちいは、つんと横を向いた。行動に反して尻尾はパタパタとせわしない。

（嬉しいんだな）

仙人が笑みを浮かべながらちいの頭を撫でていると、玄関の扉が開く音がした。二人が玄関の方に首を向けた時、

「メリークリスマス！」

と陽気な声とともに中田さんが入ってきた。

「おばちゃん！ 見て見て！ このリボン可愛いでしょ」

「あらあ。素敵ね。仙人さんからのプレゼント？」

「うん！」

中田さんはちいの頭を撫でると、手に提げていた紙袋に手を入れた。

「じゃあ私からもプレゼント」

中田さんが取り出した物はリボン付きのネコ缶だ。

「あう……これは、王宮の猫が食べているという最高級ネコ缶」

ちいの顔はぐずぐずにとろけ、ネコ缶を抱き込んだ。

「それと仙人さんにはこれ」

仙人が渡された小包を開けると、羽織りが出てきた。

「……何？」

「はんでんよ。仙人さんの衣はずいぶん重いでしょ？」

仙人はさつそく上衣を脱ぐとはんでんを着た。

「おお。これは温かいな。しかも軽いし。ありがとう、中田さん」

「どういたしまして。じゃあ、ケーキも買ってあるからさつそく食べましょうか」

中田さんは紙袋からケーキの箱を出した。耳慣れない言葉に仙人が首をかしげるのに対して、ちいは目を輝かせた。

「わーい！　じゃあ私化けてくるね」

（人型の方がたくさん食べられるもんね）

「じゃあはい、これ。新しい服よ」

「わあ、ありがとう！」

ちいは渡された袋を加えて、跳ねるように出ていった。

そして数分後。

「どう？　可愛いでしょ」

そう言って出てきたちいを、仙人はぼかんと見つめていた。  
こたつの向かいでは中田さんが拍手を送っている。

「……真っ赤」

中田さんがちいにあげたのはサンタの衣装だった。商店街で客引きの女の子が着ているような可愛い服だ。

「これで私もサンタね！」

「よく似合ってるわ」

「サガ、どう？」

「あ……うん。可愛い」

赤い色も、ミニスカも、頭に乗った小さな帽子もよく似合っていた。

（サンタって、何？）

仙人のサンタ像は迷宮入りだ。

「さーて。ケーキを食べるよ」

中田さんがメリークリスマスと書かれたケーキを切り分けていく。

全員がケーキをもらったところで、クラッカーを手に持った。

「じゃあいくよー。せーの！」

そしてちいの掛け声でクラッカーが引かれた。皆が声を合わす。

「メリークリスマス！」

祝福の言葉が破裂音とともに散った。

寒さも忘れるような、和やかなクリスマスは始まりだ。

そして後日、クラッカーにハマった仙人は度々ちいを驚かし、そんな仙人から中田さんへお手製入浴剤がプレゼントされたのだった……。

## クリスマス（後書き）

うん、この話一年ねかせたんですよ。来年はこの話を完結させたいです。

### 仙人の楽しい仲間 その三

雪がちらつく季節になった。一晚寝れば白銀の世界に変わっている。そんな窓からの景色を二人はうんざりとした顔で見っていた。

本日は一月四日である。

「あゝあ。積もっちゃったね」

「そうだな。雪かきしないと」

そう言いながらも仙人はこたつから出ようとしない。ちいもこたつ布団にくるまってみのむし状態である。

「中田さん大丈夫かな」

「雪でも自転車で来れたから、大丈夫だろう」

スリップしないのかと訊けば、気合いでなんとかかりますと返って来た。得意顔で。

「違うって、滑らないかを心配してるんじゃないの。捕まらないかを心配してるのよ」

「……は？」

仙人が半目になった時、外で自転車が止まる音がした。中田さんが出勤してきたようだ。

ちいはその音に反応して、こたつから出ると窓枠にひょいっとぶ

ら下がる。

「ほらサガ来てよ」

器用にしつぽで手招きされて、仙人はしぶしぶこたつから這い出る。もぞもぞと半ば這いながら窓から顔を出した。顔に冷気が刺さって痛い。

そして視界に映るのは出勤してきた中田さんの姿。ダウンジャケットを着こみ、手袋をしつかりはめ、ニット帽で頭を守り、マスクで顔を覆っている。

「うわ……怪しいな」

思わずそう零してしまった。

「でしょ。すばらしい完全防備よね」

そう話をしている間にも中田さんは自分に積もった雪を払って玄関に入ってきた。

「おはようございまーす！」

今日も元気な中田さんだ。二人はすぐにこたつに戻り、暖を取る。そして中田さんはコート類を全て玄関にまとめて置くと、仙人の部屋に入ってきた。

「仙人さん、ちいちゃん。あけましておめでとうございます」

今日は新年が明けてからの初出勤だ。中田さんは正座をしてしっかりと礼をした。

それを見て二人はこたつから出、中田さんの前に座って礼を返す。

「あけましておめでとうございます」「」

言われて初めて年が改まったことを知った二人だ。テレビもなく、カレンダーの管理も中田さんだったので、二人は正月感なくこの三日間を過ごしていた。

「お昼はお雑煮にしますね」

「餅か」

「わーい。おもちだ」

「喉に詰まらせるなよ？」

かの有名な名無しの猫も餅を喉に詰まらせたという。

「ふん！ちゃんと人に化けて食べるもん」

軽口を叩きあうのは年が変わっても変わらない。二人は中田さんが台所に行くと、先を争うようにこたつに入った。

「やっぱりこたつよね」

中で火鉢に入れられた豆炭の付喪神が頑張っているおかげだ。

「ああ。もう出たくな……」

「うわ……」

仙人が言葉をつぐんだのと、ちいがうんざりした顔で呟いたのはほぼ同じ。

仙人は雪が降る外を見やって、小さく溜息をついた。

「なんか来たな」

仙人と仙猫のセンサーは百発百中である。

ほどなく玄関が開く音がし、

「ごめん申し上げるが、ここに何仙姑かせんこはおられるか？」

張りのあるつややかな男の声が響いた。

「はい。どなたですか？」

そこに台所からひょいっと中田さんが現れた。

そして彼女を見たその男は、人間をまじまじと見て驚いたようにこう言うのだ。

「確かにあのひきこもりが人間を雇っている」と。ここを尋ねる人々の第一声はほとんどそれだ。

中田さんは仙人の友だちなのだろうと、彼を仙人の部屋に通す。

「仙人さん。ご友人が尋ねてこられましたよ」

本当は全て筒抜けだが、中田さんは一応用向きを仙人に伝えて障子を開ける。

「……籠っていることには変わりはないのか」

男は呆れた顔でこたつに入り背中を丸めている仙人を見下ろす。

「うるさい」

むっとした顔で言い返す仙人からは一欠けらも歓待の意を感じられない。

「な〜んだ、仕事バカじゃない。久しぶりね〜」

ちいがこたつ布団にくるまったまま片手をあげた。

男はコートを脱ぐと、鞆とともに床に置いてこたつに入る。ぴしりと背筋が伸び、仙人とは対照的だ。

中田さんはしげしげと訪ねて来た男を見る。

（彼、仙人さんのご友人というからには仙人なのよね？）

今まで中田さんはサガ以外の仙人を二人知っているが、そのどちらも変わった服装をしていた。だが、目の前の男が来ているのはスーツだ。なかなか品がよく、光沢があり皺がいつさい入っていない。彼はワックスで前髪を撫でつけ、オールバックにしていた。

なるほど、仕事ができそうなイメージだ。

（ピツシリとアイロンがかかってるわ……これはいい奥さんがいるか、それとも超几帳面な性格……いえいえ、どこかのおぼっちゃまという可能性も）

「そこで私を観察している女中よ。暖かい茶を用意してくれまいか？」

「あ……只今！」

どきつと中田さんは心臓を跳ねさせ、そそくさと台所へと戻る。

「で、仕事中毒のお前がなぜここに？」

仙人はこたつの上のみかんに手を伸ばし、のんびりと向きながらそう尋ねた。

「私が遊びに来たわけないだろう。仕事で日本に来たついでだ」

「ふーん、今度はずいぶん若い顔をしてるじゃない」

「若手の力が強まっているからな」

ぼつりぼつりと話が始まったところに中田さんがお茶を持ってやってきた。そつと二人の前に湯呑を置いて、すーっと部屋の端っこに座る。さりげなく三人の話が聞きたいのだ。残念ながらけつこう存在感があるのだが……。

「それはそうと、その女中を紹介してくれんか？ 本来なら最初にすべきだが、そなたのコミュニケーション能力の未発達を考えれば致し方の無いことだ」

空気になろうとしていた中田さんは、男によつて話の輪に呼び出された。

仙人はみかんを口に運びながら、すみっこで正座をしている中田さんに手招きをする。こたつに入れと言いたいらしい。

中田さんありがとうございますと、暖かいこたつに入り間近で

客人を見た。彼もまた中田さんを見定めるかのようにじっと見ていたのでなんとなく気まずい。

「この人は家政婦として雇っている中田さんだ。で、この男は仙人の曹国舅、そうつこくぎゅう縮めて曹と呼んでいる」

二人は互いに紹介されるとお見知りおきをと軽く頭を下げた。

「えっと……曹さんは他の仙人さんとは違ってスーツなんですね」

遠慮がちに中田さんは気になったことを言ってみた。

「ああ。仕事に必要なからだ」

「仕事？ 人間と一緒にですか？」

仙人が人と交じって仕事をしているということがどこか信じられない。いつも見ている仙人がほとんど外に出ないからだが……。

「あたり前だ。言っておくが、仙人だからと言って何仙姑のようにひきこもっている奴ばかりではない」

「あ……そうなんですか」

考えていたことを見透かされたようで、中田さんは内心ひやりとする。

「曹は私たちの中でも祖国一途な奴で、ずっと官吏をしているんだ」

「官吏と言うと……政府関係者ってことですか？」

「そうだ。王朝のころから官吏として働いている。新国家になった今は外交官だ」

曹国舅は姉が皇后として嫁いことから、仙人になる前も政治に深くかかわっていた。

仙人になってからは気の向くままに顔を変え、年を変えては政治に携わっている。役所も地位も様々である。

「あんたが外交？ うわぁ……相手の国が可哀そう」

「祖国の発展には外国との駆け引きが欠かせないからな」

「中国と言えば、経済発展が目覚ましいですね。経済成長率が日本よりも上になったんでしたっけ？」

「我が国の底力はまだまだある。これから日本にもっと差をつけてやるさ」

胸を張って曹国舅は誇らしそうだ。本当に彼が中国を愛していることが分かる。

「がんばれ」

それに対して投げやりな仙人の返事。政治というより、外の世界事態に興味がない仙人だ。

「そなたは昔から一欠けらも愛国心がないな。真っ先に祖国を飛び出して……」

「私には忠誠心がないからな」

「猫にも忠誠心はありませーん」

曹国舅は湯呑を置いて、深々と溜息をついた。

「そういえばそなたは則天武后のお召しをすっぱかしたような奴だったな……」

「ああ、あれは面倒だった」

ずずーっと仙人はお茶をすすった。

「本当にお前は昔から変わらん」

「人がそう簡単に変わるか」

仙人の言葉に曹国舅はふっと笑った。それは苦笑のようで嘲笑のような曖昧な笑み。

「変わる奴は変わるさ」

それから曹国舅は中田さんに向けて、日本の暮らしについて色々聞いた。平均年収や生活保障、社会救済制度など仙人とちいには耳慣れない言葉が羅列する。

それに中田さんは答えられる範囲で答え、曹国舅はふむふむと頷きまた質問を重ねる。

「ほんと、まじめよね」

「息がつまりそうだ」

真剣な雰囲気の中、仙人とちいはやれやれと顔を見合わせる。  
そのうち曹国舅の気も済んだのか、慇懃に礼を述べると腕時計に  
目を落とした。

「……ん、もうこんな時間か。少し長いをしてしまったな、午後か  
らは打ち合わせがあるんだった」

「きりきり働いてこい」

「過労死しないでね」

曹国舅はさつと立ち上がってコートを羽織った。

「仙人は不老不死だ」

「はいはい、わかってるって」

冗談が通じないわねとちいはごちる。

「それと何仙姑、これを老師から預かって来た」

彼が鞆から取り出したものは書状だった。老師という言葉に仙人  
は固まる。

「し、師匠がこれを？」

「元気にしているかどうか案じておられたぞ。では、達者でな。ま  
たこちらで仕事があれば顔を見に来る」

表に達筆で何仙姑殿と書かれたその書状に手を伸ばしてはひつこめを繰り返している仙人を一瞥すると部屋から出ていった。中田さんが彼を見送りに行く。

「中田殿よ。あれは手のかかるところもあるが、純粹なやつだ。気長につきあってやってくれ」

玄関で曹国舅は優しく笑いながらそう言った。その笑みは旧知の仲間に向けられるもの。

「こちらこそ、色々楽しませてもらっています」

曹国舅はおかしそうにくくつと笑った。

「本当に肝の据わった人間だ」

そう最後に言い残すと、彼はかき消えるように消えた。

（優しい人……）

「なんだと!？」

中田さんがお雑煮の続きでも作るうかと台所へもどつとした時、仙人の声が飛んできた。

気になって部屋を覗くと、硬い顔で仙人が手紙を読んでいた。

「あの……どうかしたんですか？」

気遣わしげな中田さんの声に、仙人はゆっくり顔をあげた。その

顔はどこか不安げで泣きだしそうだ。

「師匠が……近いうちに来るって」

「あら、それは楽しみですね」

仙人の師匠である人物には前から関心があったのだ。その人が来るとなればおもてなしもしっかりしなければいけないだろう。

「逃げようかな……」

「むりむり、捕まるって」

嫌そうな仙人とうきうきしている中田さん、そして諦めなと諭す  
ちい。

三人の生活が今年も始まった。

仙人の楽しい仲間 その三（後書き）

一度書き始めたら書きやすいんだよね、この話。でも、書くまでのやる気が起こりにくいのもまた問題……。さてさて、ちょいと気合をいれないといけませんね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2139q/>

---

サガとちいと中田さんと

2012年1月13日15時45分発行